

聖徒の道 1973 7



心の糧

愛の力



デルバート・L・ステイブレー

聖典は私たちに神は愛であると教えている。愛は神が私たちに与え、私たちが神に与えることができるものの中で最も素晴らしいものである。神への愛を示す真の尺度は、尺度を越えて神を愛することである。神は、「そのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった」ことによって私たちに対する愛を明らかにされたのである。（Iヨハネ4：9参照）

永遠の父なる神とその御子の間の愛は父親たちと息子たちの間にある愛と同じものであった。そのような愛が、私たちの受けたり与えたりする能力をはるかに越えたものである、と思っただけではない。私たちは救い主が示された完全な愛に匹敵する愛を持つことはできないかも知れない。なぜならキリストは神がお与えになった特質を体現された方だからである。しかしこれは私たちがすべてが努力して求めなければならない目標である。

今の世で一番必要とされていることは人が心に愛を抱き主の御旨に従順になることによって神に立ち返り、愚かな行ないや問題をなくすことである。愛なくしてはこの世は混乱し続けるであろうし、罪と邪悪にふけり、正義の神の裁きが世に下るときまで悪化の一途をたどるのである。すべての悪事、不正、わずらいや悲しみそして犯罪などをいやすものは愛——この一語に尽きるのである。

愛は、もしそれが正しい方法で用いられるならば、世の人々を平和と理解のうちに一致結束させるであろう。

今日、幸福で喜びに満ちた人生の要素であって最も無視され踏みにじられているのは「愛」という言葉である。

もしもイエスが実際に行なわれ推奨された優しくて深遠な、思いやりにみちた愛が皆の心に満ち満ちるなら、人間社会の最も崇高な理想や信頼が理解され、この世を天の王国にするのに欠けているものは何もなくなるであろう。愛はまさに地上の天国である。従って、かなたにある天国は、愛がなければ天国ではありえなくなるであろう。

使徒パウロは愛を、すべてを完全に結ぶ帯と呼んだ。愛は古くて新しいものであり、かつ愛の偉大な戒めは律法を全うするものである。

愛は、気の合った両親が子供たちに心をこめた世話や温かい愛情を示すことにより家庭ではぐくまれていく。両親は息子や娘たちの愛と信頼を求めながら思いやりと理解の心を持って接しまた子供たちの幸福についても関心や福祉を示すのである。使徒パウロは次のような賢明な忠告を与えている。「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえり見ない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、不信者以上にわるい。」（Iテモテ5：8）

私はひたむきに子を愛した母親であるデビディナ・ベイリー姉妹が自分の子供たちの将来の世話、福祉、導きや幸福について瞑想して得た証を一部紹

介したい。彼女は1970年7月にこの世を去ったが、これはその16年前に書かれたものであり、子供を心から愛する母親の最も素晴らしい贈物である。

「私はよく眠れるたちなのに、今宵はいつになく目がさえて、ねつかれぬまま横になっている。私は子供たちにこの言葉を残していきたい。もしおまえたちが私を愛するなら、私のために神の戒めを守りなさい。もし私を愛していないならおまえたち自身のためにそうしなさい。おまえたちのお父さんとお母さんがたとえどんな栄光に至ろうとも、私はおまえたちと一緒にいたいだけだから。

私はおまえたちに命じる。たとえ私がここにいなくなると、この世でおまえたちの世話をしあげることができなくなっても、決してこの福音から離れてはいけぬ。お互いにねたんではいけない。私はおまえたちひとりびとりをみな同じように愛しているのだから。私はおまえたちみんなに公平であるようつとめてきた。互いに責め合ってはいけない。この世の楽しみを追い求めてはならない。サタンとその使いたちの力を警戒しなさい。彼らの力は大きくゆるがせにできない。私がおまえたち全部を愛していることをいつも思い出していなさい。おまえたちは神の霊の子供たちなのです。おまえたちのお父さんと私がこの現世で親としておまえたちを世話する責任を受けているように、永遠の世界でもう一度家族として共に生活することができるのです。

神が私たち両親に、子供たちの幸福と福祉と世話を上手に計画するにあたって、愛と知恵と正しい判断を祝福されますように。

どうか子供たちが正しく生活し、真理を愛し、善い行ないをするよう助けることができますように。

神が若人たちを祝福し、愛にみちた模範的な両親の賢明な教えに従い、理解し合いむつまじく、安らかに生活することができますように。」

聖徒の道 1973

も く じ

感謝を神にささげん、予言者の導き………	
………スペンサー・W・キンボール…	290
神のもとに子らは安し………	ボイド・K・パッカー… 293
兄弟たちを力づけてやりなさい………	ポール・H・ダン… 296
歴史のひとこまを語る夕べ………	298
方針とプログラム………	307
神との交わり………	L・H・O・ストーブ… 208
誰のしもんだ！………	ドーン・アセイ… 309
おもちゃばこ………	311
小さなお友だちへ………	ハートマン・レクター・ジュニア… 312
美しいおうひエステル………	メアリー・エレン・ジョリー… 314
いろいろなものがかかれていますよ！………	
………ジュディ・ケイプナー…	316
征服者………	ジョン・M・テイラー… 317
質疑応答………	322
すぐりの木………	ヒュー・B・ブラウン… 326
雁の話………	マイケル・D・パーマー… 328
ベルファスト便り………	ハーバート・F・ミュレイ… 330
モルモンユーモア………	333
ローカル・ニュース………	334

今月の表紙

……野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほども着飾ってはいなかった……だから何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。(マタイ6:28, 29, 31)

バプテスマのヨハネは、野の花のように天父から衣食を与えられた。また自分自身の思いわずらいを捨てて、イエス・キリストのために道を備える荒野で呼ばれる声となったのである。しかしそのように宣べ伝えるヨハネには、生命をつなぐに必要なものが与えられる。衣食に対する思いわずらいを微塵も持たなかった。しかしヨハネには、着物として毛ごろもが、また食物としていなど野蜜が与えられた。その上ヨハネは自然から学び、さらに救い主の道を備えるにあたって、霊的な恵みが授けられたのであった。

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

ハロルド・B・リー
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール	ハワード・W・ハンター
エズラ・タフト・ベンソン	ゴードン・B・ヒンクレー
マーク・E・ピーターセン	トーマス・S・モンソン
デルバート・L・ステイプラー	ボイド・K・パッカー
リグランド・リチャーズ	マービン・J・アシュトン
ヒュー・B・ブラウン	ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアングズ (内務伝達部長), ジョン・E・カー (配送・翻訳部長), ドイル・L・グリーン (教会誌編集主幹), ダニエル・H・ラドロウ (教育資料担当主幹)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

ローカル編集

高木まりゑ

今月号のレタリング

平井 美秋
(東京第3ワード部)

聖徒の道7月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円

感謝を神にささげん

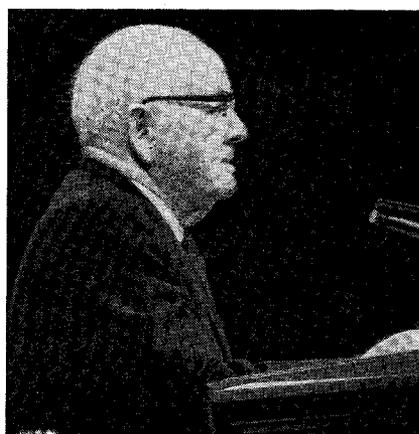
予言者の導き

——教会の指導者たちを支持する特権——

いかなる舞台といえども、この末日に教会がくり広げた数々の歴史的な場面に匹敵するほど著しく興味を引きおこし、かつ重要な場面上演したものはないであろう。舞台はニューヨークに始まり、オハイオ、ミズーリ、イリノイ、そしてユタへと移って来た。舞台装置や背景も変り、それを演ずる人々もまた変ってきた。今日、またひとりの偉大な指導者が支持された。この場において、そのような重要な出来事の舞台に私たちも上っているとは、何という大きな特権にあずかっていることであろうか。この教会の指導者の交替にあたって、重要なことは、神権定員会および聖徒の会衆が、感謝の念を表し、支持と信頼を誓い、誓約を再び新たに持つ機会を持つということである。

ハロルド・B・リー大管長の召しは何年も何年も昔から行なわれてきた大管長の召しの方法と全く同じ型式にのっとって行なわれた。従来の大管長と同じく、リー大管長は、すべての同じ鍵を持ち、同じ権能を持ち、同じ教会を代表している。ただひとつの違いは教会が比較にならないくらい大きくなっているということだけである。

1830年に教会が設立された当時、教会は、ほんの一握りの人々から成り立っていた。それゆえ、予言者ジョセフ・スミスは最初、本当に小さなグループを管理すればよかったのであるが、殉教のときには数千人にふくれ上がら



十二使徒評議員会会長
スペンサー・W・キンボール

ていた。

ブリガム・ヤングが大管長になったとき約4万人の会員がいた。1877年新しい大管長ジョン・テイラーは約14万5千人を管理した。1887年、ウィルフォード・ウッドラフの管理下に約19万2千人の会員がいた。1898年、ロレンゾ・スノーが大管長になったとき約25万3千人の会員がおり、ジョセフ・F・スミスのときは28万人近くになっていた。ヒーバー・J・グラント大管長のときは50万人近く、ジョージ・アルバート・スミスの時は100万人の会員がいた。そして1951年、デビッド・O・マッケイが大管長になった時、110万人以上の会員がいた。

ジョセフ・フィールディング・スミスが大管長になったとき280万の会員が

おり、そして、ハロルド・B・リーが大管長になった今、その数は約320万人となり、しかもなお急速に増加し続けている。

リー大管長が、争いや批判で紛糾した諸委員会や総会を通じて選ばれたのでもなく、さらにまた人々の投票によって選ばれたのでもなく、神より召され、さらに人々により支持されたということを知るのには、まことに心強い限りである。

ここ3年の間に3人の大管長が教会を管理することになった。「デゼレト・ニュース」紙の論説に、次の様に書かれている。

「大抵の組織では、この様な指導層における度重なる交替は、指揮機能に混乱をきたし、人々の間に、ためらいと不安な感情が見られるのが普通である。

だが、これと対照的に、この歴史的な時期に教会内に見られた感情は、安定と明確な目的に裏付けされたものであり、変遷のただ中であっても、確固たる一致そのものが貫かれていた。」

(1972年7月8日付デゼレト・ニュース紙〔英文〕)

神から与えられた型式には、いかなる誤りも、争いも、野心も、利己的な動機も入る余地はない。主は、御自ら主の教会を管理する指導者たちの召しを手中に留めおかれている。それを知ることには、大きな関心の的でもあり、

重要なことでもある。

ハロルド・B・リー大管長は、1972年7月7日に大管長になったが、1941年4月10日に使徒に按手聖任されている。そして、疑いもなく、彼の前任者同様、遠い遠い過去においてこれらの責任に予任されていたのである。予言者ジョセフ・スミスは1世紀以上も前に、次の様に言明している。

「世の人々を教え導く職に召されている人は皆、この世の始まる以前の天上の大会議において、その目的のために聖任されていたのである。」(ジョセフ・フィールドینگ・スミス編「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P. 365)

初期の使徒のひとりには、ジョセフ・スミスについて次の様に語っている。

「その権能は、彼が初めて天使にまみえ、賜物のいくつかを授かった時に彼の頭上に固められたものではなかった。……それは、だれか聖なる神権の権能を持つ人から按手を受ける必要があった。」

程なくして、ジョセフは、この地上で最後に鍵を保持していた人々の按手により、その権能を受けた。その使徒の話はさらに次の様に続いている。

「イエスが……3人の弟子たちを山に連れて行かれた時、イエスは3人の前で御姿を変えられた。その時、モーセとエリヤが、彼ら3人に恵みを施した。そして、その時ペテロは按手聖任を受けて、神権時代の鍵を託された。ペテロは同僚であるヤコブ、ヨハネと共に、これらの鍵を保持した。

彼らは近代に現われ、共にジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの頭上に手を置いて、ふたりを彼ら自身の持つ機能、すなわち真理の特別な証人の権能を持つ者として聖任した。」(ジョージ・Q・キャノン著「福音の真理」第1巻〔英文〕P. 253, 254)

私たちにあって意義深いことは、142年前の1830年4月6日から今日に至るまで、1分1秒たりといえども、教会

が神より導きを受けずに存在してきたことはないという事実である。

ジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長の体から霊が去った瞬間、ジョセフ・スミスの言葉にあるように、予任されていたハロルド・B・リー大管長は、十二使徒評議員会の会長として、正当に神の命を受け、真実の承認された指導者となったのである。

ジョージ・Q・キャノン副管長は、予任について次の様に言っている。

「ジョセフ・スミスが、聖任される以前に、すでに様々の賜物を持っていたということは驚くべき事実である。彼は聖見者であった。それは、聖任される前に翻訳に従事したからである。予言者でもあった。それは、聖任を受ける前に多くの偉大な出来事を予言したからである。……また啓示を受ける者でもあった。教会が組織される以前に、神がジョセフに様々の啓示を与えていたからである。それゆえ、ジョセフは、肉の身で聖任を受ける以前から予言者、聖見者にして啓示を受ける者であった。」(「福音の真理」P. 253)

1972年7月7日、十二使徒評議員会は、これらすべての賜物を保有していた。そして1941年4月10日以来、これらすべての賜物と鍵と完全な神権を持っていたハロルド・B・リー大管長は7月7日、十二使徒評議員会により、これらの諸権利を保有している旨再確認された。

私たちの主は、種々の交替に備えて常に完璧な準備をしておられる。今日では、12人の使徒とふたりの副管長、合わせて14人の使徒職を持つ人々がいて、状況が変わればいつでもその権能を行使できる状態にある。この人々は皆、聖任順位が進んで自分に順番が回って来ればいつでも指導者の地位につくことができるよう、聖任されているのである。

ジョセフ・スミスの時代から今日まで、およそ80人の人々が使徒職の権能を与えられた。だが、死が間にはいる

ため、その中で大管長の地位についた人は11人しかいない。主の僕たちの死は、主の統治下にあるため、主は、その指導の職につくよう予任されている人々にのみ、教会の筆頭職につくことをお許しになるのである。生も死も主の統治の要因となる。主により新しい使徒が順次選ばれ、そのときの生ける予言者に啓示され、その予言者が新しい使徒を聖任するのである。

教会の最高定員会では、聖任順位の厳守が、基本的なことである。使徒たちは皆、これを完全に理解しており、教会の事柄に精通している会員も皆、この完全な継承方法に熟知している。

ジョセフ・スミスは、主から受けていたすべての鍵と権威と権能を、十二使徒たちに授けた。ジョセフは、彼らにすべてのエンダウメント、それに聖なる洗いと灌油の儀式を施し、また結び固めの儀式を施した。

今日私たちは、イスラエルの子らがしたように、聖約を新たにし、新しい予言者を支持する機会にあずかっている。かつて主がヨシュアに言われたことが、今日、リー大管長にもあてはまる。「あなたが生きながらえる日の間、あなたに当ることのできる者は、ひとりもないであろう。わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共にいるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。」(ヨシュア1:5)

「民は……言った、『……われわれは主に仕えます』。

『われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に聞きしたがいます』。

こうしてヨシュアは、その日、民と契約をむすび……。』(ヨシュア24:21, 24, 25)

今日、私たちも、これと同じ契約を新たにしようではないか。

初期のある指導者は次のように言った。「私は、大管長に注目している。——私は、船旅で氷山に閉じ込められたり、大嵐に遭遇したとき、きまって、非

常に関心をもって、船長に注目したものである。……私は船長の目を見、その振舞いを見た。……船長を見れば、自分たちがどれほど危険な状態にいるのか、よく判断できる……と考えたからである。私は、甲板に出ている人が長老たちを除いて皆、船室へ降りて行きたくなるような嵐の中に生活を続けている。……」(「福音の真理」P.271)

それゆえ、リー大管長を支持することは、私たちの特権なのである。

恐らく、あなた方も知っていることと思うが、ひとつの大切な規則が、予言者ジョセフによって私たちに与えられた。「王国の奥義の鍵のひとつをあなた方に与えよう。それは永遠の原則であり、神と共に永遠に存在してきた原則である。もしだれか立ち上がって他人を攻撃し、教会の欠点を捜そうとしたりまた自分は義しいが他の人々は道からはずれていると言ったりする人がいるなら、その人は、背教に通じる道はかなり進んでいると判断すべきである。そしてそのような人は、もし悔い改めないなら、神が生きてましますように確かに、背教に陥るであろう。」(「予言者 ジョセフ・スミスの教え」P.156, 157)

キャノン副管長は、再び警告を発している。「もしあなた方のうち、不平不満をつぶやいたりあら捜しをしたいなどと思う人がいたり、また福音の精神に合致しないようなまちがった思いを抱いたり、言葉を口にしたりする人がいたら……その人は、誠心誠意悔い改め、ずっと低い所におり立って謙遜になり、主に、その罪の赦しを乞うべきである。これは、非常に由々しい罪だからである。

神権を持つ人々は、ただの人間にしかすぎない。彼らとて過ちを犯す人間である。……(このことは神権者自身が一番良く知っている。) かつてこの地上におり立った人で、全く罪を犯さなかった人は、御子をおいて他にはひとりも存在しなかった。……」

私は、このことが教会幹部の兄弟たちの場合にも、完全に当てはまるものと確信している。

「にもかかわらず、神はこれらの人々を選び出された。……神が選び出され、神が彼らに聖なる神権の権能を授けられたのである。こうして、これらの人々は地上における、神の代表者となったのである。神はこれらの人々をキリストに従う群れの羊飼いとし、またシオンの城壁の番人とされた。そして、神がこれらの人々に与えられた権能に関しては、神がすべてその責任を負っておられる。そして、主イエスの日には、これらの人々は主の御前に立って、この権能をどのように行使したかによって裁かれるであろう。もし彼らが、この権能を誤って行使したり、主の御業や主の民の救いに災いする方向で行使したなら、主イエスの日に彼らにどんなわざわいが下ることであろうか。主御自身が裁きを下されるであろう……。」(「福音の真理」P.276)

この使徒はまた、主は裁いたり、叱責したりする権能を、正規に組織された教会の評議会にのみ与えておられるのであって、一般の人々には与えておられない、と説明している。「そして聖なる神権の権能に対し……反抗の声をあげる者は……悔い改めない限り、地獄へ落ちるであろう。」(同上)

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、晩年に、次のように言われた。「私は天父に、この高齢にあっても、私に残された生涯を、神の靈感によって導かれるべく、その僕たる私に、みたまをお注ぎ下さるよう、乞い願っている。イスラエルの人々に申し上げる。主は私であれ、だれであれ、この教会の大管長の職にある人が、あなたがたを誤った方向に導くのを決してお許しになることはない。その様なことは、主の御計画にもなければ、主のみことろにもない。もし、私がそのようなことをしようとするれば、主は私からその地位を取り去られるであろう。これはまた、だ

れであれ、人の子らを神の御言葉やその義務から誤った方向に導こうとする者についても言えることである……。」

(「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」[英文] P.212-213)

この言葉は私たちに深い確信を与えてくれるに違いない。

また、ある指導者は次のように書いている、「この教会では、人が地位を求めて、それが得られるものではない。もし、教会で、ある人が特定の地位につこうとする野心を持っていることがわかった場合、その野望は主に認められるものではないため、そうした事実そのものが、その人を挫折へと導くであろう。これは、この教会のすべての役員について言えることである。……すべての役員は神の管理の下にある。神がこれらの役員を選び、指名されるのである。そして、彼らが間違ったことをした場合、それを正すのは神のさることである。」(ジョージ・Q・キャノン「デゼレト・ウィークリー誌」1898年5月21号より[英文] P.708)

なにとぞ主が私たちの新しい大管長と副管長たちを祝福し、完全に支持して下さるように。私たち民が一致してハロルド・B・リー大管長を支持するよう、祈っている。私はリー大管長がこの地上における主の予言者であることを知っている。私は、ヨルダン川で、ニューファイの民の間で、そしてニューヨークの森で聞こえた言葉が神の御声であって、この神は私たちの天父であられることを証する。また、神が「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言われた時の御方が、この教会の頭たる御方、すなわち私たちの救い主イエス・キリストであることも証する。私は、リー大管長が神の予言者であることを証する。そして、もし私たちがリー大管長に従うなら、王国は偉大な進展を遂げるであろう。私はこのことを全身全霊をもって証申し上げる。イエス・キリストの御名により、アーメン。

神のもとに 子らは安し

——ホーム・ティーチング程大切な教会活動はない——

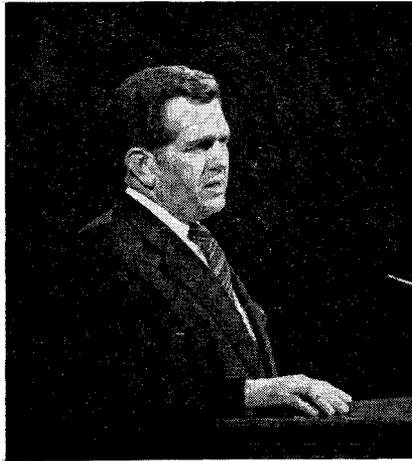
昨日の朝と今朝、リー大管長と共に過ごした今、皆さんは私たちが特別な召しにあずかっている兄弟として、大管長と共に神殿に入って共に会合を開くことが、どんなにすばらしい経験であるかを想像することができるであろう。

きょうの話の主題を決めることができたのは、少し前にそのような会合に出席した時のことであった。その会の開会の讃美歌で「いとよやさし」を歌った。後にリー大管長は祈りの中でこの讃美歌の1節「神のもとに子らは安し」(讃美歌97番)という言葉が使われた。そして聖徒の安全をはかり、保護して下さっている全能の神に、厳粛に感謝を捧げ、また引き続き聖徒たちを守護したもうよう祈られたのである。

私は暴力と不安に色どられている世界の中に、お互いのことを気にかける人々がいることを思うと、深い感謝の念で一杯になった。

パウロはエペソの聖徒にこう言っている。「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。」(エペソ2:19)

聖徒たちと同じ国籍であるということとは大きな意味がある。誰でも悔い改めて備えをし、バプテスマの儀式を受けさえすれば、この国籍を得ることができる。バプテスマを受ければ末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として



十二使徒評議員会会員
ボイド・K・パッカー

決してひとりぼっちではないのである。

人は神の息子または娘である。家族はお互いに助け合うように教えられている。これを実行している家族の中では「子らは安し」という言葉が当てはまる。それにこの家族の構成は驚くほど教会組織の形態にぴったり合っている。

例えば、若い男性や女性が親のもとから離れて住んでいても、一人ぼっちで放置されているわけではない。彼らを見守る者が、いつもいるからである。子供たちが結婚すると、再び同じ循環が始まる。

ある人は結婚しないが、それでも決してひとりぼっちのままおかれていることはない。

子供たちが家庭を離れて自分の家庭

を作り始めると、おじいちゃん、おばあちゃんと呼ばれる立場に立つようになった両親は、新婚の時のようにまたふたりで人生に直面することになる。これが通常の予期される姿であり、望ましい形である。なぜなら主の履みたもう道はとこしえに変わることがないからである。(1ニーファイ 10:19 参照) 会員は決してひとりで放っておかれることはない。

子供たちは両親を敬うように教えられるが、時に遠く離れて住むことがある。しかしいずれの場合も教会は守護の手を差し伸べている。

また連れ合いが他界しても、年とった未亡人はひとりぼっちではない。この時も必要であれば、教会の組織が、未亡人が必要とすることを物心両面にわたって世話し、安らかに住めるようにするからである。

その方法は簡単である。2名の神権者が定員会会長から召され、定期的にホーム・ティーチャーとして各会員の家を訪れるように監督から割り当てられるのである。ホーム・ティーチャーは個人および家庭を守護するものである。

私はホーム・ティーチングの題を選んだが、教会にはもっと心を踊らせるおもしろい活動があることをよく知っている。一般にはほかの主題の方が訴える力が強いかもしれない。

少し前、私は聖餐会が終わってからあ

る家にいた。お母さんが十代の男の子に今日はどうだった、と聞いていた。その男の子は普通の少年と同じように正直で遠慮がなかった。「聖餐会以外はよかったよ。」

聖餐会はどうだったの、と母親が聞くと、その子は言った。「うん、高等評議員がホーム・ティーチングや福祉について話すのが終わるとはっとするよ。」

このお母さんは恥ずかしくなって言った。「デビッド、ここにいらっしゃるパッカー長老はそのプログラムの全教会の責任者なのよ。」

「知っているよ。なぜ何とかしないんだろう。」男の子はこう言った。

一本取られた感じである。実は私はちょうど今、承知している限りのことを尽くしているのである。説明させていただこう。皆さんはきっとこの密接に関連し合っているふたつのプログラムが非常に興味あるものであることに気づかれるであろう。興味あるものであるかはさておいても、このふたつは皆さんの安全に必要な欠くべからざるものなのである。

あの少年にかかつては、私も基本的な神権プログラムについて話した高等評議員とレットルをはられるであろう。しかし訓練や練習をやかましく言うコーチも、ほんの数分の発表のために何時間もの練習を要求する音楽の教師も同じことになる。また、人生の基本的な事柄に注意を払って勉強に励むよう勧める両親も、同列に並ぶであろう。

繰り返そう。ホーム・ティーチング以上に人々を引きつける活動があるかもしれないが、これ以上に重要なものはない。

おもしろいことに、非常に基本的なことは、それで当たり前であると取られるのである。例えば私たちの体内に血

液が循環している、体を支えるために栄養を運搬し、不要な物質を運び出している。また病気や病原菌の感染から保護するための武具をまとっている。この血液の供給は心臓という間断なく働く、信頼すべきポンプによって維持されている。心臓は命に欠くことのできないものと言えよう。

ところが普通、指の切り傷の方が注意を引く。心臓の方は、鼓動が途切れがちになったり、止まるまで誰も注意を払わない。そんな事態になってはじめて注意を払っているのである。

不思議なことに、ホーム・ティーチングはいかにも空気のように当り前のものと思っていて、大部分の会員があまり注意を払っていない。型にはまった訪問をし、時には面倒なものと考えている始末である。それでも会員がよそでは知らない保護と世話を受けるのは、このホーム・ティーチングによってなのである。

十代の若い同僚に一晚5、6軒の家を訪問しようときそっている人を思い浮かべていただきたい。ふたりは家族を励ますために訪問し、彼らが霊的に何を求めているかを知り、人々の福祉に配慮し、すべての人が緊急の時に訪ねてくれる人がいることを知って安心できるようにするのである。

病気で倒れてもすぐ助けの手が差し伸べられる。子供の世話はしてくれるし、訪問の調整がはかられる。このような場合、神権ホーム・ティーチャーと扶助協会の訪問教師が共に働く。問題が悩みのある十代の子供や、しつけのむずかしい幼児である場合もある。

この神権ホーム・ティーチングという系路には、地上の教会にある人的資源の限りを尽くして、助け支える力を注ぐことができる。それだけではない。天界の限度一杯に贖いの霊の力を注ぐことができるのである。

ホーム・ティーチングを通して数々の悲劇を避け、沈む霊を引き上げ、物質的な必要を満たしてきた。悲しむ人は慰められ、虚弱な人は祝福を受けていやされている。この仕事は大きさに予告することなく静かに進められるが全能の神の霊によって始められた制度であって、この民の霊的成長に欠くことのできないものである。

教会の指導者は神権ホーム・ティーチングを成功させるため、多大の努力を払っている。ホーム・ティーチングは至極当然なもので見られているが、いつも強調されているし、これからもずっとそうであろう。社会は変転し、教会のプログラムに様々な追加はあっても、ホーム・ティーチングの原則に変更があったことは一度もなかった。この制度がなければ教会はたちまち教会ではなくなってしまふ。もう一度言おう。ある活動はもっとおもしろいかもしれないが、これ以上に大切なものはないのである。

私はいろいろな活動のプログラムが用意されていることを感謝している。これらのプログラムは香料、調味料、デザート役目を果たし、人生を楽しいものにしてくれる。特に若い人々にとってそうである。私は教会の諸活動がとても好きである。これらの諸活動が無視されるのを見たくないし、私から取り上げようとしてもできないであろう。

ホーム・ティーチングしか行かない教会は、若い人々にとって調味料もデザートもない食事のように全くおもしろくないかもしれない。しかし私は各地の指導者が全く活動のプログラムだけに集中して、ホーム・ティーチングを無視する傾向がないだろうかと懸念している。

監督の皆さんに申し上げる。活動プログラムだけで青少年を導こうとする

のは、チョコレートやソーダ水で運動選手を養成しようとするようなものである。若い人はそれに引かれるかも知れないが、あまり栄養が得られないであろう。青少年を救う努力としては、ホーム・ティーチングに時間を費やし注意を払うこと以上に効果の大きいものはない。というのも、ホーム・ティーチングの目的は家庭を強化することにあるのであって、十代の人がよく口にし、また承知しているように、「それでこそ本来の姿である」からである。この家庭を結ぶ生命線が生きれば家庭を強化できるばかりでなく、活動も向上し、味わいも加わることがわかるであろう。

若い人々を元気づける方法は数多くある。私たちは工夫に富んでいて、心の踊る方法を一杯案出する傾向があるようである。しかし結局は程なく主の方法に落ち着いていくであろう。

きつねをわなで捕えてちょっとした財産を築いた毛皮商がいた。彼は冬の間南方へ出かけて行って、その間わなはよく訓練した若手の助手にまかせることにした。それでわなのしかけかたとえさを置く場所を教えた。

ところが春になって帰ってみると、わずかしかきつねがつかまっていなかったので落胆し、「教えたとおりにしたのか」と聞いた。

「いいえ、もっといい方法を発見したんです」助手は答えた。

監督と定員会の指導者の皆さん、ホーム・ティーチングに注意するよう勧告したい。ホーム・ティーチャーがなすべきことを違った方法でするのを黙って見ているのはならない。青少年を強めようとして、千にも及ぶ方法を編み出すことができるであろう。しかし間もなく主の方法にもどらなくてはならなくなるのである。

聖典に次のように書いてあることが

思い出される。「主は言う、われ約束してこれを果さざりしことあらんや。

われ命を下すに人これに従わずば、われ我約束を取消し祝福を与えず。

その時、人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず、主の約束果されざればなりと。されどかくの如き人は禍なるかな。その報いは地の下に潜み、天よりの報いあらざればなり。」(教義と聖約58:31-33)

ホーム・ティーチャーの皆さん、機械的な訪問をし、時々骨の折れる仕事だと思っている皆さん、この責任を軽視したり、きまった作業としてこなしたりしてはならない。皆さんがホーム・ティーチングに使った時間、歩いた距離、ドアをノックしたこと、すべての挨拶、励ましの言葉は2倍になって帰ってくるであろう。

ホーム・ティーチャーが家庭を訪問して教えられることがよくあるのは、興味深いことである。ホーム・ティーチャーが犠牲を払い、奉仕しているのは事実であるが、そんな状況の中でも、恵みを多く受けているのは一体訪問されている家族なのか、ホーム・ティーチャーなのかかわからないことがよくある。

私も非常に貴重な教訓を得た経験がある。

結婚する少し前、私は年上の同僚と2人で、小柄な外出できないでいる老婦人のホーム・ティーチャーに召された。この婦人は病身で、ドアをノックしても動けないので、入ってきて下さいと返事することがよくあった。ベッドから出られないため、そばでメッセージを伝えることがしばしばであった。

私たちは何かの拍子に、この人がレモンアイスクリームが大好きであることを知った。それでよく訪問する前にアイスクリームの店に寄った。彼女の好みを知っていたので、私たちは二重

の理由で歓迎されたのであった。

先輩同僚が何かの理由で行けない時があった。私は一人でいつものように訪問する前にレモンアイスクリームを買った。

彼女はベッドの中にいた。そして翌日孫がとてもむずかしい手術を受けるので心配でしかたがありません。ベッドのそばでひざまずいて、孫のために祈って下さいと私に頼んだ。

祈り終ると、彼女は私が間もなく結婚することを思っただろう、こう言った。「今晚あなたにあることを教えてあげましょう。」彼女は、「あなたにお話して聞かせたいことがあります。いつもこのことを忘れないで下さい」と言った。そしてひとつの教訓について話してくれたのである。私はこれまで一度もこの教訓を忘れたことはない。彼女は人生を回想して話し出した。

立派な青年と神殿で結婚し、何年か若い夫婦の家庭生活と家族を育てることに専心していると、ある日伝道の召しの手紙が舞い込んできた。

驚いたことに、ふたりは家族で遠い国へ出かけて行って、そこで伝道を開始する召しを受けたのであった。ふたりは忠実に、よく召しを果たし、何年かたって家に帰ってきた。そしてまた家族を育てていく責任を果たし始めた。

そこでこの小柄な婦人は、話のある月曜日の朝に絞った。これは不快な洗濯の月曜日と呼ばれる日である。その日ちょっといざこざがあって、意見が分かれ、続いて夫婦の間に非難の言葉が飛びかかった。どういうわけか老婦人はそれが何をきっかけに始まり、何をめぐって起こったのか覚えていなかった。「とにかく、私は門の所まで行って、夫が仕事に向かうのを見送りながら、最後の意地悪なとげとげしい言葉を夫の背に投げかけたのでした。」彼女はこう述べた。

それから涙を浮かべて、その日事故があって夫が二度と帰って来ない人になったことを話してくれたのである。「50年も私は地獄に住んでいるようでした。私が夫に投げかけた言葉が意地悪な、とげとげしいものであることを忘れられなかったからです。」

これが、若いホーム・ティーチャーに話してくれたメッセージである。彼女はこの話を決して忘れてはいけませんと言った。私はそれ以来この教訓から豊かに恵みを受けてきた。その時から夫婦は一言も食い違う言葉を口にしなくともやっていけることを知ったのである。

私は時々あの家に訪問したことや、費やした時間、アイスクリームに使ったわずかなお金のことを考える。あの小柄な姉妹は、もうずっと以前に亡くなり、私の先輩同僚もすでにこの世の

人ではない。しかし、ホーム・ティーチャーが教えられたあの大きな経験を私は今でも忘れていない。また結婚の聖壇の前に立つ若い男女に、彼女の教訓を幾度となく伝え、世界各地の人々にも説いてきた。

ホーム・ティーミングには靈的にすぐれた要素がある。ホーム・ティーミングの割当てを受けて出かける神権者は、皆測り知れない恵みを受けて帰ってくる。

教会でどんな責任を受けているかと聞かれて、「ホーム・ティーチャーの責任だけです」と答える人があるのを見かけたことがある。

ホーム・ティーチャーの責任だけ。言いかえれば、群れを見守る守護者の責任だけだと言っているに等しい。しかしこれは、神に仕える最も大切な責任である。

冒頭に引用した讚美歌の歌詞「神のもとに子らは安し、世の造り主導きたもう」が現実となるのは、あなたのホーム・ティーチャーのおかげなのである。

イエスはキリストであることを証する。この教会はキリストの教会でありまた王国である。私たちはキリストから神権と権能を与えられている。私たちは予言者を頭にいただいているが、予言者は生身の人であり、地上のはてまですべての支部、伝道部、ステーキ部、ワード部、支部に恵みを及ぼすことができるばかりでなく、各家庭、個人をも訪れて、祝福しあるいは支え、安らかに住めるようにすることができるのである。イエス・キリストの御名により、アーメン。

兄弟たちを 力づけてやりなさい

——新しい会員をフェローシップする聖徒たちの責任——

主はニーファイの民に御姿を現わされた時、次のように言われた。「さらにまた汝らに告ぐ、汝らは悔い改め、わが名によりてバプテスマを受け、幼児のごとくならざるべからず。しかしならずば、とうてい神の王国に住むことを得ず。」(Ⅲ ニーファイ 11:38) これは、主御自身が与えられた警告であっ

た。
ちょうど23年前の秋、私は南カリフォルニアのチャップマン・カレッジに入学した。私は、そこで、ガイ・M・デイビス教授という、哲学者であり、教育者であり、教師でもある方の下で、すばらしい影響を受けながら生活した。そして、23年たった3週間前の

金曜日の晩、私はこの気高い心を持った立派な人が、幼な児のようになってバプテスマの水に入り、この教会の会員になるのを見る機会を得た。

この友人のバプテスマを見ていて、私は1つの聖句を思い浮かべていた。ルカの記録によれば、主は前任使徒のペテロを戒めて、次の様に、簡明な助

言と指示を与えられた。「……あなたが改宗したときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(欽定訳ルカ22:32) ガイとその家族の所属することになったワード部の立派な監督を初め、ホーム・ティーチャー、ワード部の会員の皆様が、私の兄弟であるガイを力づけて下さるよう、私は祈っている。

しばらく、私の個人的な経験を話させていただきたい。兄弟たちを力づけるということを説明するのに、私の家族に対するフェローシップの経験をお話しすれば、理解が容易になるのではないかと思う。何年前か、私の末娘が転校する事態に直面した時、娘は新しい経験に対して期待と興奮に胸をふくらませて待ち望んではいたものの、だれにでもあるように不安と懸念も入り混じっていた。私と妻は、娘の経験を有意義で、また積極的なものにしてあげたいと思い、新しい経験に対する心の備えをさせるため、数時間、共に過ごす時間を持った。

ついに、その待ちこがれた日がやって来た。娘に何か霊的な慰めと導きを与えてやろうと、特別な夕べを計画した。それがすむと、娘は翌日への期待を込めて、ドレスを出していた。

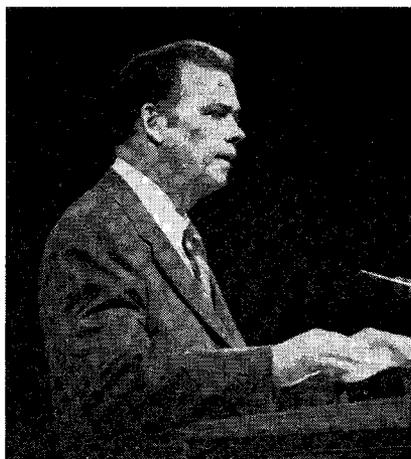
翌朝の朝食時、娘はペチコート姿のまま現れると、こう言った。「おとうさん。私、今日学校へ行かない方がいいような気がするの。」

「どうしてだね。」

「気分が悪くなりそうなの。」

娘が何を言おうとしていたか、おわかりであろう。お父さん、私は新しい境遇にどう対処したらいいのか、わからないの。友だちはできるかしら。先生は私を気に入ってくれるかしら。みんなの中に入れていけるかしら。みんなは私を受け入れてくれるかしら。こういった問題は、私たちが新しい、変わった社会に入った時、必ずだれでも持ち合わせる懸念なのである。

娘は、私がどう答えるかを知っていた。そして、私が学校まで車で連れて



七十人最高評議員会会員
ポール・H・ダン

行くことを承知した。私たちが校舎の前に着くと、始業5分前のベルが鳴った。娘の目は涙で一杯になった。私は車を降りると、娘の手をとって車から降りた。ふたりで3メートルほど歩くと娘は私の足にしがみついてきた。その時、娘は、子供にしかできないような目付きで私を見上げると、いかにも理屈っぽくこう言った。「お父さんもし私を本当に愛しているなら、私をこの中に入れてください。」

「ケリー。これは、おまえには理解できないことかもしれない。だが、私は、おまえを愛しているからこそ、こうしておまえを中に入れてあげるのだよ」私は言った。そして私は実際、実力行使で中に連れて入った。ところが入口の内側に入ると、娘は私のもう一方の足にしがみついて、離そうとしなかった。たくさんの生徒が通り過ぎて行った。そして、ついに小さな奇跡が起きて、事態を全く変えてしまった。

どこからか、明るく、素敵な少女が現れた。その少女は、他人につくすために自分を忘れてフェローシップできる子であり、友だちを力づきなさいという救い主の訓戒を喜んで受け入れることのできる子であった。若さではち切れんばかりのこの少女は、「ケリー、

お元気？」と尋ねた。

「ええ、元気よ。」

「あなたはどの教室に入るの？」そして、娘が答えると「すごいわ。私、去年その教室だったのよ。さあ、私が連れてってあげるわ。」と言ってくれた。

そして、ケリーは自分で気づかないうちに私の足から手を離すと、10歩ほど歩いて行って、自分のしたことに気がついた。私は、娘が私の方を振り返って言った時の言葉と指図めいた文句を忘れることはないだろう。「あっ、そうだ、お父さん。帰ってもいいわよ私、もうお父さんがいなくても大丈夫よ。」

大人と同じように、フェローシップし、友だちになる方法を知っている小さな人たちのいることを神に感謝している。

毎日、数千という人々がこの教会に加入している。私たちが皆、兄弟たちを力づきなさいという主の勧めに従う気持を持つよう、祈ってやまない。私は、偉大な監督、素晴らしいホーム・ティーチャー、そして、他の会員の皆様が、私の友人であるガイ・ディビスをよくお世話して下さい祈っている。

私はこの教会が神の教会であることを証する。これは真実である。私は、リー大管長を、予言者、聖見者にして啓示を受ける者として支持する。リー大管長が、神より召され、聖任されたことを私は知っている。私は神が生きておられ、イエスがキリストにましますことを知っている。これらの証を、イエス・キリストの御名により申し上げる。アーメン。



歴史の ひとこまを 語る夕べ

ブリガム・ヤング大学恒例のモルモン芸術祭の呼び物は、末日聖徒によって書かれた歴史のひとこまを朗読する小品発表会である。

今月号の聖徒の道には、1972年度芸術祭の末日聖徒の開拓者をテーマとした小品発表会から、幾つかを選んで載せる。

小品には、歴史上の出来事をフィクションにしたものと共に開拓者の書簡、日誌、日記、大会での話が収録されている。どの作品も、西部へ向かう聖徒たちの生活を暖かく考察し、現代の私たちの生活に福音の原則をどう生かすことができるかを示唆している。読者は、以下のページに語られる聖徒たちに親しみを覚えることであろう。

靈感に満ちたこれらの短篇を収集構成したのは、ハロルド・オックス博士、ジュデイス・ピケット、クリステン・アダムス、トム・ベイ、ウォルト・ベギー、エベレット・ブラック、クリスティ・クラーク、パメラ・ゴーマン、キャサリン・ジョン・アービン、リベカ・クランド、リー・ラッセルである。

自分の国や町、地域社会、友人の間で教会に加入することになった人々は、他の人々により良い新しい道を示すという

点で開拓者である。そのような人は、時にあざけられ、物笑いの種にされ、迫害さえも被る。

ここにあげる作品は読むだけでなく、家庭や教会の授業や活動において発表することもできる。発表は比較的簡単に行える。読む人が受持ちの箇所をあらかじめ読んで慣れておくことだけでよいのである。1、2回の練習をするとさらによいだろう。

家族のようなくつろいだ場では、読む人と聞く人を分けないうで起立せずにすわったまま読んでもよいだろう。授業では生徒の前に立ったり、椅子を持ち出してすわったり、生徒たちのまん中に囲まれる形にして読んでもよい。

ホールのようにもっと大勢の場合は、ステージや照明設備を使うことができる。読み手全員が黒っぽい服装をしたり鮮やかな色の服を着たり、あるいは趣きを添えるために開拓者時代の衣服を用意してもよいだろう。

作品の朗読はほとんどどんな状態にも適用できる。随所に出てくる讚美歌を、聞く人たちにも一緒に歌ってもらうことができる。

立っていようと座っていようと、話そうと聞こうと、作品のひとつだけを発売しようと全部を発売しようと、また家族で行なおうと大勢の前で発売しようと、あるいは自分でただ読むだけであろうと、それは全く自由である。どのような場所であれ、ここにあげる小品はすべての読者、聴衆にとって靈感の源となるだろう。



氷

登場人物

スザンナ・タイラー

タイラー氏

宣教師

ジェーン・タイラー

スザンナ：

父と兄弟は、姉がバプテスマを受けて、末日聖徒の教会に入ることに大反対でした。でも姉は最初の機会を逃さず、バプテスマを受けました。1832年の12月に、教会の長老がひとり近所に越してきました。彼は姉の招待を受けて私の家を訪れました。

タイラー氏：

私が家を留守にしている間に、娘はあなたがたモルモンの説教師の話を聞きました。そして今、バプテスマを受けるなら二度と家には入れないと言いわたしましたが、娘はバプテスマを受けたがっています。私はあなたがたに言いたい。だれでも私の娘にバプテスマを施す者は、命を保障しないと。息子も私も銃をもってかけつけるつもりだ。

宣教師：

タイラーさん、私たちはあなたがたの意志に反して娘さんにバプテスマを施すことはしません。しかし、私たちの証するこの教えが真実で、もしあなたが、娘さんが教えを受けるのを妨げるなら、罪は私たちや娘さんではなくあなたの頭にとどまるでしょう。

スザンナ：

この言葉は父の心を刺しました。父はひょっとするとモルモンが正しく自分は間違っているのではないかと思い始めました。そこで、そのことについて娘に尋ね、おまえの自由にしていよと許可しました。こうして父は自分に責任がかかってくるのを免れようとしたのでした。

タイラー氏：

ジェーン、おまえは自分で決めなさい。もしあの人たちの言っていることが本当だったら、これは世界で一番の宗教かもしれない。しかし間違っていたら最低だ。あの人たちは本当か嘘かを知っているが、私にはわからない。決心する前にそのことをよく考えなさい。

ジェーン：

私は長いこといっしょうけんめいに、断食をして勉強し、お祈りをして考えてきました。お父さん、できるだけ早くバプテスマを受けることが私の義務だと思っています。

スザンナ：

すると父は、姉とモルモンの長老と私たちを牛そりに乗せて、2マイル離れたエリー湖に向かいました。そこで皆は湖に張った氷に直径1メートルの穴をあけ、ジェーンはバプテスマを受けてイエス・キリストの教会に入りました。



ジェーン・グローバーの 日記の抜粋

ジェーン・グローバー：

ある朝私たちはグースベリの実を拾いに行こうと考えました。タナーおじさんは2頭の馬に軽い荷馬車をとりつけました。そうして、ライマンさんのうちの姉と妹、まだ幼いタナーおじさんの孫娘、それに私とタナーおじさんで出かけました。森に着くと、私たちは年をとったおじさんに、実を拾っている間建物の中に入って休んでいるように言いました。

時間もそう経たないうちに、小さい子と私は、ほかの人たちとはぐれてしまいました。すると突然叫び声が聞こえました。私たちがタナーおじさんの見える所まで歩いていくと、何人かのインディアンがまわりに集まってホーホー、キャッキャッと叫んでいました。そうこうするうちにほかのインディアンも集まってきました。私たちが馬車に乗ってタナーおじさんが走らせようとする時、4人のインディアンが馬車を押えつけ、ふたりのインディアンが馬の金具をつかみました。そして別のインディアンが私を馬車から連れ出そうとやってきました。そのとき私は腹が立つと同時に恐ろしくなって、

私を馬車から出して助けを求めに行かせて下さいとタナーおじさんに頼みました。おじさんは「だめだ、とんでもない。もう手遅れだ」と言いました。

タナーおじさんの顔はまるで雪のように血の気が失せていました。インディアンは、おじさんの腕時計とハンカチを取りあげました。そうしている間に、インディアンは私を馬車から引きずりおろそうとしました。

私は黙って天のお父さまに助けを願い始めました。苦闘しながらお祈りをしていると、全能者のみたまが私の上に降り私は大力をもって立ち上がり、インディアンの言葉で話し出しました。私が神の力によって話していると、インディアンは馬と馬車をそのままにして私の前に立ちました。インディアンたちは頭を垂れ、私にわかるようなしぐさで、はいと答えました。タナーおじさんと女の子たちは言葉も出ないほどの驚きようで、その光景をながめていました。

私は自分たちが置かれている事態を知りました。インディアンはタナーおじさんを殺して馬車を焼き、私たちの女の子を捕虜にするつもりでした。私はそのことをはっきり知らされました。私が話し終わると、インディアンは私たち皆と握手をし、タナーおじさんから奪った物を皆返しました。しかし、おじさんはインディアンにハンカチをあげました。このときにはあとのふたりも戻っていて私たちは急いで家に向かいました。

主は私の言ったことを一部教えて下さいました。それはこのようなことです「私には、あなたがたインディアンの勇士が私たちを殺そうとしていることがわかる。大霊があなたがたを見守っていて、心に思うことは何でも見通すことを知らないのか。私たちはお父さんの木の実を集めに来たのだ。あなたがたを攻めに来たのではない。もしあなたがたが私たちに、たとえ髪の毛1本でも危害を加えるならば、大霊があなたがたを地に打ち倒し、息の根を止めるであろう。私たちがふる里を追われてこの地方へやってきた。あなたがたもそうである。私たちがあなたがたを襲うためではなく、良いことをしに来たのである。私たちが主の民であり、あなたがたも主の民である。あなたがたは殺人と悪行をやめなくてはならない。主はそのことを怒っておられる。やめなければあなたがたは繁栄を見ないであろう。あなたがたはすべての土地とこの森とあの川とこの馬とが自分の物だと考えている。しかし地上の物は呼吸する空気から一切切何ひとつ、あなたがたの物ではない。それは皆大霊のものである。」



リチャード・ベンソン

登場人物

監督

リチャード・ベンソン

ヒーバー・C・キンボール

フィービー・ベンソン

監督：

リチャード・ベンソン氏は1816年英国のワシントンで誕生し、1895年センター・フリークで死去されました。泣いてはいけません。彼は今安らかに休んでいます。

ベンソン氏は英国でヒーバー・C・キンボール長老からバプテスマを受け、同長老によってタイン川河畔のニューカッスルへ伝道につかわされました。そこで47名にバプテスマを授けましたが、その中にはフィービー嬢も含まれていました。そののちにノーブーから、召しに応じて英国に派遣されました。この時にベンソン氏はフィービー嬢と結婚し、彼女を伴ってソルトレーク大盆地へわたりました。しかし休息する暇もなく、ふたりはブリガム兄弟からセンター・クリークに入植せよとの召しを受けました。さらに荒野へ250マイル入っ

た地点でした。

私はベンソン兄弟を知っていました。彼は主を愛して、召される場所へはどこへでも赴きました。

聞き手：

「山の上や荒れる海を」讚美歌100番を2番まで歌う。

リチャード：

1886年の4月、私は大塩湖まで15日間馬車に揺られて大会に出席しました。ソルトレークの神のタバナクルに聖徒たちと共に集いました。ヒーバー・C・キンボール兄弟が私の名を呼ぶのが聞こえました。

ヒーバー：

リチャード・ベンソン、大ブリテン島へ伝道。

監督：

あとで、リチャードはヒーバー兄弟と少しの会話を交しました。

ヒーバー：

ベンソン長老、出発はいつが都合よいでしょうか？

リチャード：

そうですね、キンボール兄弟、家に帰って妻に話してみなくてはなりません。

ヒーバー：

リチャード兄弟、それでは1カ月も遅くなってしまいます。

リチャード：

しかし……………

ヒーバー：

何か言うことがありますか。

リチャード：

ええ……穀物の刈り入れや耕作や種まきがありますし、この冬や来年の冬に備えてフィービーや子供たちのためにたきぎを作らなくてはなりません。

ヒーバー：

リチャード兄弟、私はフィービーさんを知っています。あなたがいなくても彼女はやるでしょう。あなたの別れの挨拶を監督に託し、ご家族の面倒を見るように頼んでおきましょう。幌馬車隊があさってミズーリに向かいます。ベンソン長老、神があなたを祝福されますように。抗夫や水車大工や石工たちを連れて帰って下さい。われわれを助けてシオンを築く技術と信仰を持つ人々を。

リチャード：

私はなぜでかけたのだろう。フィービーに別れの言葉を言

いに戻りもしないで。それは、私もフィービーを知っていたからだ。私にバプテスマを授けたヒーバー・C・キンボール兄弟は、彼女にとっても神のしもべに変わりない。そしてキンボール兄弟が男に「行け」と命じる時、みよ、彼は行くのだ。

監督：

リチャード・ベンソンの妻フィービー・フォリスター、1820年出生、1904年死亡。

フィービー：

監督が戸口に立ってこうおっしゃった時、私はどう感じたことか……

監督：

あなたのご主人は、フィービーさん、あなたのご主人は今平原を旅している途中です。英国伝道に召されて。

フィービー：

私は打ちのめされたように呆然と立ちつくしていました。2年間。24ヶ月、720日、17,520時間、彼は家を留守にします。夫は行ってしまった。いったいどうして、家に戻ってそのことを私に教えてくれなかったのだろう。

監督：

わけをお話しましょうか？ベンソン姉妹。

フィービー：

私は子供たちを見ました。子供たちは目を丸くしてぼかんと、監督と私を見くらべていました。私は夫の言ったであろう言葉を知っています。そして私が言ったに違いない言葉もわかっています。私たちは主の召される所に行かなくてはならないことを承知しています。でも、いったいなせ！家に戻ることくらいはできたはずなのに。

いえ、もう出発したのなら……1カ月早く帰ってくるでしょう。みんなはいつも、私がどんなに悪い時でも何とかやっけていくと言っていました。私はそうしなければなりません。1日1日と、720日も。仕事は全部私にかかってきました。家の内も外も、すべての勘定書から子供の世話や懲罰まで、みな私の仕事になりました。病気の時、喉頭炎やコレラや天然痘の時、夜、泣き叫ぶ声は私を呼びました。いつも私を。

しかしどうやらお金は足り、たきぎも燃えつきず、麦は減り方が少ないようでした。私たちはカレンダーの720枚の紙をめくり終わるまで、暖炉の上の時計が1億2千614万4千回目の振り子の音をさせるまで、何とか1日1日持ちこたえ

ました。そしてとうとう、夫であり父である人が戸口に立ちました。私たちは、主が望む所へ行く人々の味わう喜びを知っています。

聞き手：

「山の上や荒れる海」の3番、4番を歌う。



手車隊

登場人物

語り手1
ブリガム・ヤング
エリザベス・テート
ジェーン
語り手2
サラ
ポリー
ポリーの母
チブレット・ボーイ
ウィリアム・テート

語り手1：

シオンへの集合は、ほとんどの改宗者が目標とするところであった。しかしソルトレーク市の教会本部までの旅は、ヨーロッパからの移民者にとっては、船旅に次ぐ陸路の旅で並

み大抵のものではなかった。教会員を最も短時日に、困難も少なく、中央のシオンのステーキ部まで送り届ける仕事は、いろいろな方法で試みられた。1853年に、ブリガム・ヤングは荒野を横断する手車隊と手車の使い方についてこう書き記している。

ブリガム・ヤング：

各家族は牛、手押し車、一輪の手車、少量の小麦粉を持ち不用品は皆置いてミズーリ川を出発すれば、厄介な家畜をつれ、ぎょうぎょうしい隊列を組むよりも速く、疲労も少ない状態でここに到着するであろう。彼らは早く到着できる。たとえ早くなくとも、かかる費用はずっと少なくすむ、もっと早く出発すれば例年大勢の兄弟を塵に埋める流行病を避けることができる。ミズーリ出発の日から90日分を確保するだけでよい。1台の手車あるいは大家族ならば2台の手車で、横断の必要品は皆運べるであろう。

語り手1：

こうして人々は集合し、ユタへの1900キロの歩行旅行に備え、手車を用意した。それまでの人生のどのような出来事も比較にならないこの旅に際して、人々の背景はそれぞれ異なっていた。

エリザベス：

私はエリザベス・ゼビア・テートです。私は1833年にインドのボンベイで生まれ、上流階級の富裕な家で育ちました。インドの最高の学校で学び、14歳で大学を卒業しました。インドにいる家族は、私が教会に入るのを喜ばませんでした。夫のウィリアムと教会を捨ててインドに留まるように勧めました。でも私は幼い息子を突然コレラで亡くしてから、両親や友人の頼みに耳を貸してはいけないと悟りました。夫は私よりも先にシオンへ向かいました。私の健康状態が、その時一緒に行くには耐えられなかったため、あとで出発することになったのです。

出発の時に、私は家族から勘当されました。英国への旅は私の経験したうちで最もつらい旅のひとつとなりました。末の女の子が病気にかかり、私が途方にくれている間に死んでしまいました。

アメリカに着いてからは、ウィーリー隊とも呼ばれた第4手車隊¹に加わることになりました。

ジェーン：

父のジョン・オロートン、母のアリス、姉と妹と私は、英国からニューヨーク州へわたってきました。そこから鉄道で

アイオワ州へ行きましたが、そこでは聖徒たちが集まって手車隊を組織していました。私は15歳で、まんなかの次女でした。私の家族は聖徒の第5団、マーチン隊²に割りあてられて1856年にソルトレーク盆地へ向かって出発しました。

1. 1856年8月15日、500名が移動開始、1856年11月9日到着。

2. 1856年8月29日、30日、576名が移動開始、1856年11月30日到着。

語り手1：

1856年に構成された5組の手車隊のうち、3組はたいした困難にも遭わずにソルトレーク盆地に到着した。あとの2組ウィーリー隊とマーチン隊は、幾度か遅延した後、この2隊で筆舌も及ばない非常に高価な犠牲が払われたことが判明した。

語り手2：

エドワード・マーチン隊の構成は、576名の男女子供、141台の手車、7台の幌馬車、30頭の雄牛、50頭の肉牛および畜牛であった。牛車は、前に行った幌馬車のわだちをたどれるように、同じ幅で作られた。いっしょに何人でもひっぱることができるよう、前には一本の横木がついていた。ほかの人は車を押して荷を運ぶのを手伝った。旅の前半は支障なく進んだ。

ジェーン：

私たちは道々歌いました。ほこりにまみれた服や陽に焼けた顔を見なかったら、人は私たちがアイオワ市から、長く苦しい450キロもの道のりを旅してきたなどとは、だれも想像できなかったでしょう。道を進みながらいろいろな歌を歌いましたが、そのひとつは「押したり引いたり」でした。

語り手2：

手車隊が2度目に滞留した地点は、ネブラスカ州フローレンスであった。J・H・レトリーはのちにジョン・テイラーにこう書き送っている。「ウィーリー隊とマーチン隊は、荒野横断に耐えられない手車だったので、ある車は心棒を取り換えなくてはならず、どの車も木の摩滅を防ぐために鉄片をねじ込まなくてはならなかった。そのために通常よりも長時間ここに滞在した。」

ジェーン：

マーチン隊は8月24日に、シオンへ旅立ちました。道を行く大勢の移住者は手車をひいて歩く私たちを笑いましたが、私たちは気にしませんでした。良いお天気で道もすばらしく良い状態でした。私は病気で、家族は皆夜になるとへとへと

に疲れましたが、シオンへの道は栄光に輝く道だと思いました。

サラ：

私は英国で初めて回復された福音を聞き、それが真実であると確信できましたので聖徒たちと一緒にならなくてははいけないと思いました。私は手車隊が組織されていたときにアイオワ市でジョンに会いました。彼も英国出身の改宗者でとても素晴らしい人でした。アイオワからネブラスカまでの長い旅の間に、私たちはよく知りあうようになり、シオンに着いたら結婚することに決めました。

ジェーン：

男の人や女の人が押したり引いたりする手車が、ところどころに物資運搬の幌馬車や乳牛の群れをはさみながら、曲りくねって続いて行く様子は色彩にあふれて壮観でした。

エリザベス：

多くの手車は、持ち主が思い思いに趣向をこらして色を塗っていました。またあちこちに「真理は広まる」、「シオン行急行便」、「祝福が苦労に続く」、「楽しいモルモン」などと書きつけられていました。時々歌う「押したり引いたり」の行進曲が、単調な一日の救いとなりました。

語り手2：

自主的に保たれた秩序と厳格な隊の規則のおかげで、1日に20キロ前後、着実に進んでいった。男も女も子供も一様にしんぼう強く歩み続けた。疲労した者や病人だけが物資運搬の幌馬車に乗せられて休んだ。

サラ：

夜は休息とレクリエーションの時間でした。夕食後家族のたき火が燃え始めると、キャンプファイヤーの炎があがり、それを合図に皆が集まりました。若者は歌い、即興のゲームを楽しみ、だれもが就寝の時間まで夕べの気晴らしに打ち興じました。

語り手1：

たき火を囲む円陣がだんだん小さくなるにつれ、皆静かになっていった。そして、消えていく残り火の上を静かに流れるのは、全員が声を合わせて歌う、幾千の旅人を励ましてきた歌の数々であった。

聴衆：

「恐れず来たれ聖徒」讃美歌23番を歌う。

語り手2：

「恐れず来たれ聖徒」の讃美歌は、10年前に西部へ向かっ

た開拓者から、今彼らにならって西をめざす幾多の人々に、歌い継がれてきたのであった。歌は英語のみならず外国語でもなじまれた。歌も終りになると、皆は毛布を取りにもどった。そして最後の就寝ラップが闇に吸い込まれるように消えると、開拓者たちは荒野を枕に眠りについたのである。

エリザベス：

霜のおりた夜があったかと思うと、秋が早くやってきました。山の斜面のポプラの林は黄色く色づき、カシの木の深紅のはん点模様が、近づく冬を知らせていました。マーチン隊はワイオミングの広い平原を下ると、希望に胸を躍らせてプラット川をのぼりました。

ボリー：

私が13歳のときに家族は英国のサセックス州ブライトンでこの教会に加入しました。両親はシオンの聖徒に合流しようと決心し、父は持ち物を皆売り払ってアイオワ市までやって来ました。私たちはそこで4頭の雄牛と2頭の雌牛、1台の幌馬車とテントを買いました。そして物資運搬の幌馬車としてマーチン隊に加わるように割り当てられました。私たちは1日に25キロ余りを進んでプラット川に着きました。大きな氷塊が川を流れ下っていました。きびしい寒さでした。翌朝14人の死者が出ました。私たちはテントに戻って祈りを捧げ「恐れず来たれ聖徒、進み行けよ」と歌いました。私はその晩母がどうして泣くのか不思議に思いました。翌朝になると私に妹が生まれました。9月23日でした。その子にエディスという名前をつけました。エディスは6週間経つと死に、スイートウォーター川の最後の橋のたもとに埋められました。

語り手1：

ララミー岩のふもとにキャンプを張った旅人たちは、失意のうちに、10月の朝を迎えた。頼みの網の食糧や衣料は容赦なく減っていった。ひとりあたりわずか7キロ半ほどの衣料は、いてつく朝にはほとんど用をなさなかった。

ジェーン：

毎日毎日人々はつらそうに手車を押ししました。屈強な男たちのまなざしは妻を気づかっていた。子供たちはだれ言うともなく、両親にびったり寄り添ってとぼとぼと歩きました。のろのろと動く列に落葉が舞い落ちると、女たちはショールをきつめに巻きなおして、心もち頭を下げ、前進するのでした。

語り手2：

急に雪まじりの突風が吹きつけてきた。最も恐れていたことが現実となったのである。刻々と不気味な雪が死のわなをしかけるように積もっていった。靴はすり減り、外気にさらされた足は濡れてこごえた。衣料は湿ったり凍りついた上に体を包む着がえの服はほとんどなかった。その上さらに深刻なことは、食糧が割当ての分量を最低に減らしてもあと数日分しか残っていないことであった。

チズレット・ボーイ：

食糧が足りなくなり始めた頃、ある日野牛の群れがそばを通りかかり、男たちは2頭をしとめました。その夜はすばらしいごちそうでした。

私の家族は野牛の肉を切り取って、日曜日のために手車の中に取っておきました。私はとてもおなかがすいていたので手車を押しながら肉のおいしそうな匂いがただよってくるとどうしてもがまんできませんでした。私は小さなポケットナイフを持っていたので、それで午前と午後、ひとかけらかふたかけらの肉を切り取りました。私は厳しいむちの罰を受けるだろうと思っていました。父が肉を取りにやって来た時、私に肉を切り取らなかったかと聞きました。私は答えました。「はい。とてもおなかがすいて、手をつけずにはいられなかったんです。」父はただ後ろを向いて、こぼれる涙を拭っていました。

語り手2：

マーチン隊は、開拓者がかつて経験したことのないほど早い雪に見舞われた。吹雪は繰り返し襲い、雪は積もり続けた。男たちは、足がいてつき、指は凍傷にかかりながらも、熱病に冒された子供を抱く母親たちのためにとぼしいき火を絶やさなかった。

ジェーン：

私は雪の中で途方にくれてしまいました。両足がかじかんでしまったのです。男の人たちが雪で私をこすりました。足をバケツの水につけました。とても苦しいものでした。一行がデビルズ・ゲートに着くと厳しい寒さが襲ってきました。私たちはその場に多くの持ち物を置き去りにしました。私の兄弟のジェームスはその夜、いつものように眠りにつききました。朝になると死んでいました。

エリザベス：

翌日には救援隊が来るだろうと祈りながら、食糧の配給がさらに減りました。しかし翌日になると、救援ではなく死が訪れました。初めにひとり、そしてひとり、またひとりと。

油が尽きてランプの火が消えるように、すうーっと命が消えて行きました。

ジェーン：

死んだのは男の人たちでした。病人ではない彼らがすっかりこごえていました。朝墓穴を掘って、夜の来る前にその穴に埋められた男の人もいました。

エリザベス：

男の人たちは靴がすり切れて、そのため転んでしまうほどでした。彼らはズックの生地や麻布のひもや衣類で足を縛りました。そのようにしても足はひび割れがしてずきずき痛み血が流れました。それは雪の上に血の跡が残るほどでした。

語り手2：

飢えは深刻であった。手車の車輪のスポークを結び合わせるのに使ってあった生皮を煮てスープにし、聖徒たちの命をつないだ。

ジェーン：

ひと晩で6人、8人、9人、10人も死者の出たことがよくありました。翌朝になると、死者は道のかたわらに埋葬されました。ある晩などは、18人が亡くなりました。地面は堅く凍って雪が深かったので、大きな穴をひとつ掘り、全員をいっしょに埋めました。

サラ：

私の恋人はワイオミングの平原で肺炎にかかり、結婚しないうちに死んでしまいました。私は兄弟たちに頼んで、長い縁飾りのついた私のショールで彼の体を包んで埋めてもらいました。彼が服をまわすに、土をかけて埋められることがとても耐えられなかったのです。

語り手1：

ソルトレーク市では大会が開かれていた。ブリガム・ヤングは演壇に登ると、聖徒たちに話しかけた。

ブリガム・ヤング：

お話ししたいことがある。1856年10月5日、手車を引いた大勢の兄弟姉妹が荒野に、現在恐らくはここから1,125キロの地点にいる。われわれは救援隊を送らなくてはならない。目標は、彼らをここに連れてくることである。われわれの兄弟を救出すること、これが今私の求める救いである。牛は送らずに、良い馬とラバを送りたい。彼らはこの准州内にいる。われわれは彼らを迎えねばならない。12トンの小麦粉と40名の御者も送ろう。

エリザベス：

喜びの声が空にこだましました。屈強な男たちは、しわの刻まれ、陽焼けした頬を涙がつたうにまかせて泣きました。幼ない子供たちは喜んで踊りまわりました。

ウィリアム・テート：

私はエリザベスがその隊の中にいることを知っていましたが、妻の到着する日が近づくにつれて、再会を考えると喜びと不安が増しました。その年の冬が例年になく早く訪れ、寒さが厳しくなると、不安は押え切れないほどに高まりました。私は愛する妻に会うため、救援隊に志願しました。途中で感じた恐れと無力感は、とうてい口で言い表わせません。われわれは間にあうのだろうか。妻は生きているだろうか。

10月31日までに、遭難者救出に250組が派遣されました。

10月20日、最初の救援馬車がウィリー隊を見つけました。

語り手1：

ほかの救援隊は、マーチン隊めざして進んだ。それでもなお数日が生死を分け、死者の数はふえていった。やっと救助隊が雪の障害を突破したとき、救い得たのは隊の一部だけであった。

11月30日、生存者がソルトレークに初めて到着すると、シオンの人々はどんな苦労もいとわず、彼らの看護と世話に専心した。到着の知らせは日曜の朝の礼拝のときにもたらされた。ブリガム・ヤングは、キリスト教信仰の真の原則にのっとった宣言をして、すぐに散会を命じた。

ブリガム・ヤング：

彼らが到着したら、収容所に彼らだけで住む姿を私は見たくない。彼らをこの町で不自由のない立派な家に割り当てていただきたい。今私の前にいる姉妹たち、また看護できる人たち、方法を知っている人たちは皆、彼らを看護し、世話して、慎重に薬を与え、食物をあげていただきたい。午後の集会は中止する。姉妹たちは家に帰って、今到着した人たちのために少量の食べ物と体を洗う用意、看護の準備をしていただきたいからである。祈ることもよい。しかしこの場合は焼いた芋やプリンやミルクが必要である。祈りがその代りをするわけではない。時と場合に応じて、あらゆる義務をまっとうしなさい。

語り手2：

そして大管長は率先して籠を垂れ、管理監督に、移住者の中に住まいのない人がいたら、ひとりといわず何人でも自分の家に連れて来るよう指示を与えた。

ジューン：

父のジョン・オロートンと母のアリス、それに姉は、救援隊がプラット橋の近くにやって来る前に死んでしまいました。私たちがソルトレーク盆地に着いた日に、妹は雪にさらされたのが原因で死にました。オロートン家の中で生き残ったのは私だけでした。ほかの人たちはシオンを見ずに世を去りました。でも私たちは、別れるのは短い間だけであることを知っています。この別離は福音のために払う高い代価ですが、その価値はあります。なぜなら、神さまは生きていらっしゃる。この教会は真の教会だからです。

ポリー：

私の足は凍傷にかかりました。兄も姉もそうでした。見わたす限り一面に雪で、ワイオミングの寒風が吹きつけていました。テントを張るためにくいを打つことができないくらいでした。私たちは一体この先どうなるか全く不安でした。そんなある晩、ひとりの男の人が私たちのキャンプにやってきて、ブリガム・ヤングが私たちを救助しに人と馬車を派遣したと告げました。私たちは歌を歌いました。ある人は踊り、ある人は叫びました。

母の容態は良くなりませんでした。母はユタのリトル・マウンテンとビッグ・マウンテンの中ほどで亡くなりました。43歳でした。私たちは最後の移住者にまじって、1856年12月11日の夜9時にソルトレーク市に着きました。生存者4人のうち3人まで凍傷にかかっていた。母は幌馬車の中で死にました。翌朝早くブリガム・ヤング大管長が私たちのところに来てくださいました。私たちの状態や凍傷にかかった足や死んだ母を見ると、大管長の頬を涙がつきました。

姉妹たちが母に葬るときに衣装を着せている間、医師は私のかかとを切断しました。足を固定してもらおうと、私は皆に運ばれて母と最後の対面をしました。その午後、母は埋葬されました。

私は時々、母が英国を発つ前に言った言葉を思い出します。ポリーの母：

ポリーや、私はあなたたちがキリストの福音の中で成長できるように、まだ小さいうちにシオンに連れて行きたいの。この教会が本当の教会だと知っているからよ。

語り手1：

エドワード・マーチン手車隊は、1856年7月28日、総勢576名でアイオワ市を発った。その後4カ月間で135名を失い、1856年11月30日、ソルトレーク盆地へ到着した。すべては善し、すべては善し。

方針とプログラム

教会の方針とプログラムは、教会員が教会内で調和のとれた生活を送れるようにと定められたものである。これら公式の指針は、「神権会報」と呼ばれる公報によって神権指導者と補助組織指導者に伝えられており、ほとんどはこれから引用されている。またその他一般的な事項も時折掲載される。

青少年は教会の標準を守る必要がある

教会の若い会員に対して、教会外の団体（ボーイ・スカウト、学校、国や地方の団体）から、大会、旅行、その他の活動への参加の招待がしばしば寄せられている。青少年に適切な準備ができていれば、それらに参加することは伝道に大いに役立つであろう。しかし現在教会の青少年が守っている標準の多くは、教会外の団体で受け入れられていないことを教えておく必要がある。（両親は）教会外の集りに参加する青少年に、教会の標準を守る気持を強くもつように勧告すべきである。——神権会報

レッスンには指定のテキストを使用すること

教会から出版されたテキストに述べられていない政治、社会問題、あるい

は哲学上の考えを、個人またはグループに、教会の組織で表明させることのないようにしていただきたい。また、個人またはグループに、このような考えの述べられている書籍やパンフレットを読むように、教会の集会や組織で勧めるのを許してはならない。

教会の指導者は、政治に関するちらしの配布や……その他の活動を伴う資金調達プロジェクトを後援したり、認めたりしないようにすべきである。——神権会報

催眠および同様の事項を避けること

グループ催眠の実演、あるいは一般の心理制御課程に加わった人々が、不幸な結果に陥っているという報告が届いている。……指導者は、このような活動に加わらないように、教会員に勧告すべきである。また、教会の指導者は、これを後援したり、奨励したりし

てはならない。——神権会報

系図の仕事における責任の系統

直系先祖を捜し出して、家族の記録を完成し、ついでその系図の情報を系図協会に提出して神殿の儀式が行なわれるようにするのは、教会員の責任である。神殿の仕事は、教会員の傍系の親戚のためにも行なうよう要求されているが、これは特権であって、責任ではない。

在世中に当時者を含む特別な結び固めがあった場合、責任の系統が変わることがある。この特別な結び固めは、再婚、離婚、養子縁組の結果生じる。責任の系統を変更する問題は、系図協会に問い合わせること。系図協会はこのような事情をどのように処理するか、大管長会から指示されている。——神権会報

神との交わり

L・H・O・ストーブ

私たち人間は、神聖な霊と肉体が結合したもので、このどちらも特別な栄養を必要としている。肉体は一日に数回食物をとる必要があり、霊もまた、霊的な食物をたびたびとる必要がある。

私たちはまことに肉なる自己、私たち自身（霊と肉体）にとって、定まった時間にたびたび沈黙思考する以上に生氣を得る方法はない。読み、経験し、祈り、学んだ事柄を、定期的に静かに内省することによって、私たちは人生のあらゆる経験を初めて自分自身の糧として消化できるのである。

日常の忙しい仕事から逃れて「創造主」と交わした誓約を新たにし、神と心から交わる機会を得、複雑かつ壮麗な大自然に思いをめぐらすのはすばらしいことである。自分が一体何者なのかを知り、また私たちの神聖な起源と行く末に思いをはせるのは大切なことである。

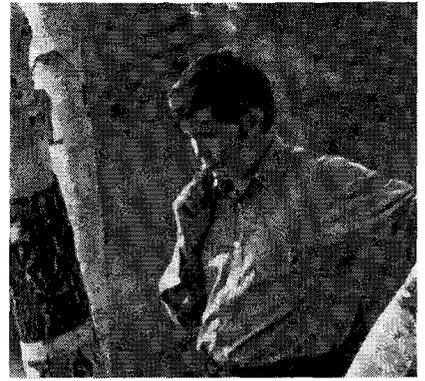
私たちが以上のことを習慣として規則正しく行ないさえすれば、私たち自身は正しく育まれるのである。それゆえに毎日規則

的に霊的な休息をとる必要がある。

このために、毎日ひとりで静かに自分のことを考えられる心地よい場所を捜し出すことが大切である。家庭はそのような聖なる所であり、あらゆる混乱からの避け所である。また、近くの公園や広場もそのような場所になり得る。ひとりで静かに祈るために森へ行く人もいる。確かに、私たちはだれでも皆、完全に自分のプライバシーを守りたいと願っている。しかし要は定期的に自己を見つめられる場所を捜すことである。

次に大切なことは、時間を見つけることである。そのためには、普段よりも早起する必要があるかもしれない。さもなければ、だれのためでもなく自分のためだけに仕事が終わった直後に少しの時間をとることである。

興味深いことには、いわゆる世界で大宗教といわれるもののいくつかは、日の出と日没が神と交わるのに理想的な時間であるということに一致している。この時間は、自然の栄光がその偉観を現わし、私たちに一層身近に感じられるときのように思われる。場所を設けるだけでなく、定期的に時間をとることもまた大切である。



人はだれでもいつも、霊的なまた物質的な食物を切望している。しかし、自分の救いを求めるか否かは、なお個人にかかっている。

規則正しく自分のことを考え、神と交わるためにどのような計画を立てているであろうか。もし私たちが自分自身を育むならすべてはひとりで良くなっていくということ、私は自分自身の人生の長い経験から申し上げたい。





トッドくんが、ふとつくえの上を見ると、白いふうとうがおいてあった。トッドくんはじろりとふうとうをにらみ、ゆっくりと手にとってあげた。ふうとうの中にはいていたものは……はたして、一まいのカードだった。カードには「ぼくは、きみのともだちだ」とかいてあった。そうしてそのうらには、くろぐるとしもんがのこしてあった。

トッドくんはかんがえた。「このカードをおくってきたやつは、ぼくのたんてい七つどうぐを失っているやつにちがいない……」

トッドくんが虫めがねをとり出して、カードについているしもんをしらべていると、弟のアンドリューがやってきた。

「それ、なあに」とアンドリューはきいた。

トッドくんは虫めがねをおいて、うるさそうに「きみにはかんけいないよ」といった。

『ふむ、あやしいやつのもんを、あつめてみよう』とトッドくんはかんがえた。そして、1分もたたないうちにカードのぬしと思われるやつのリストを作った。

トッドくんが、たんてい七つどうぐをこわきにかかえてげんかんを出ていくと「どこへ行くの」とアンドリューがいった。

「だいじな、ようがあるんだ」とトッドくんはこたえた。トッドくんは、ほんとうのたんていをするのは、きょうがはじめてである。まずトミーの家へ行くことにした。

だれの家へ行っても、どういうわけか、みないやがらずに、しもんをとらせてくれた。トッドく





んは、じけんがかいけつしたら、どうなったかをみんなにおしえてあげるとやくそくした。

そして家へかえり、あつめたしもんを虫めがねでしらべた。

「みせて」またアンドリューだ。

「うん、だけどうるさくするなよ。しんけいをつかうしごとなんだからな」とトッドくんはこたえた。

だが、いくらさがしてもカードとおなじしもんはない。『こいつはいったい、だれのしもんだろう』トッドくんはくびをひねった。

「名まえをかかないで、しもんをつけておきなうて、てきもあたまがいいね。そう思わない？」とアンドリューがきいた。

「そうさ、しかしこのカードをおくってきたやつは、ぼくとおなじことにきょうみをもっているやつにちがいない。そうと、けんとうはついているのだが……」トッドくんはまゆをひそめた。

「しかし……このしもんはだれのしもんともいっちしない」。

「よくしらべたのかい」アンドリューがたずねた。

「うん、見てごらん」トッドくんは、しもんをうつしたかみをアンドリューに手わたしながらいった。「これがトム、これがシーン、これはピーターのだ。」

そのとき、インクのついた紙をつかんだアンドリューのゆびはまっくろになった。

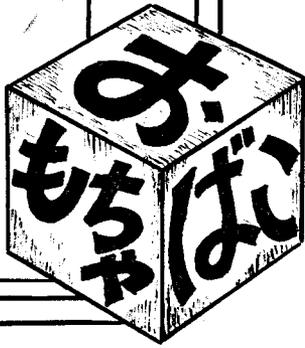
トッドくんははっとして弟のかおを見た。「ちょっとまって、ともだちをひとりわすれていた」トッドくんはさげんで、スタンプインクのふたをあけた。

そしてアンドリューの手をつかみ、そのゆびにスタンプインクをぬりつけ、カードのしもんの下におした。

アンドリューはトッドくんを見てにっこりとわらった。

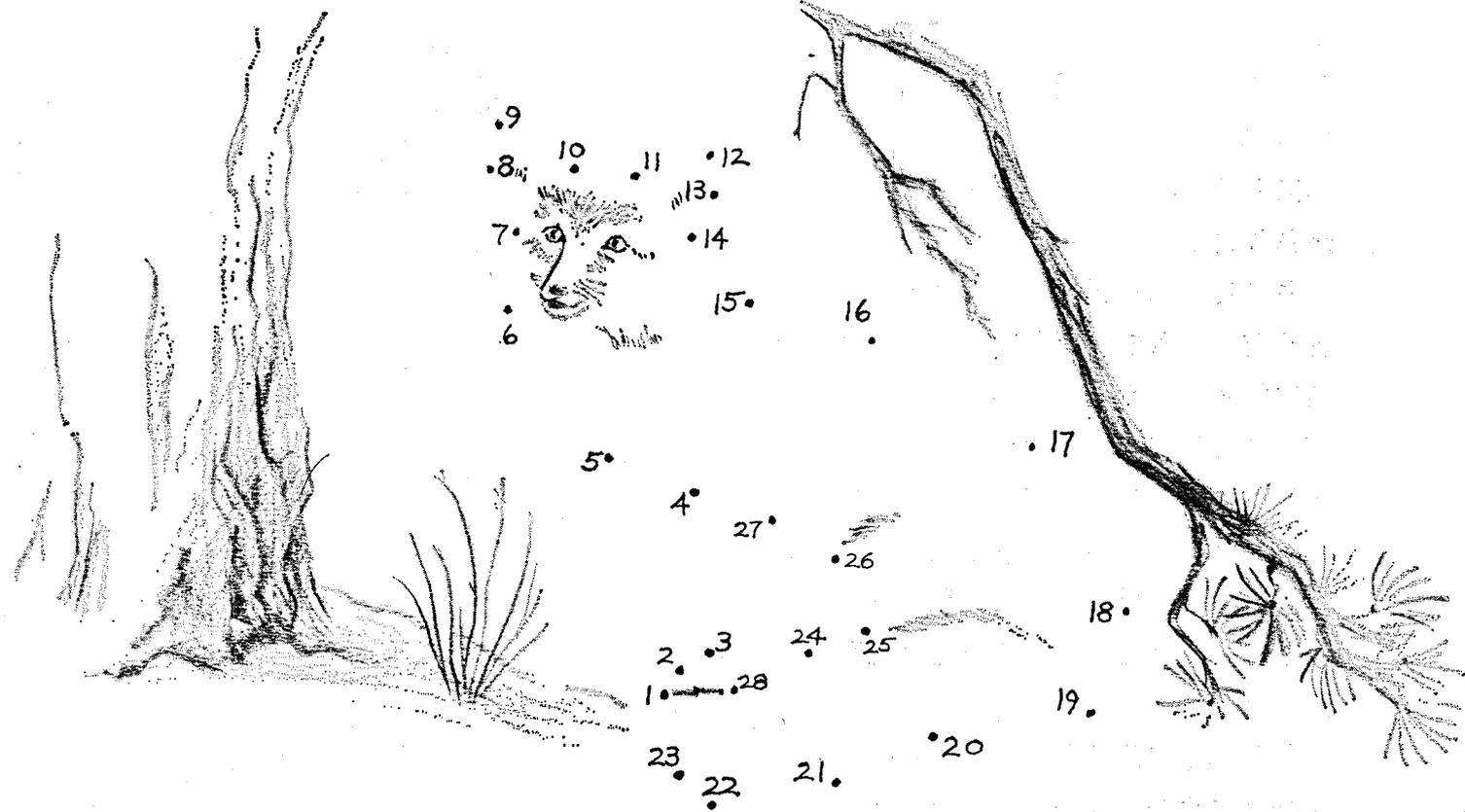
このなぞは虫めがねをつかわなくてもすぐにくことができた。このしもんはアンドリューのだった。弟がいちばんのともだちだなんてだれが気づいただろう！

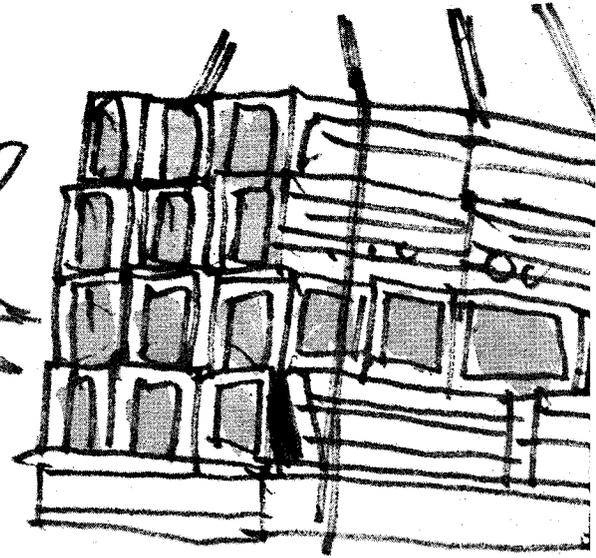
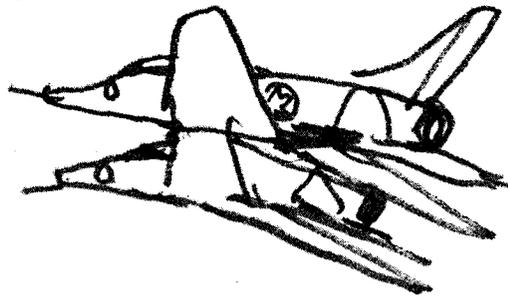




キャロル・コナー

てんをむすんでごらん
 なんのどうぶつが
 みえるかな？





小さな お友だちへ

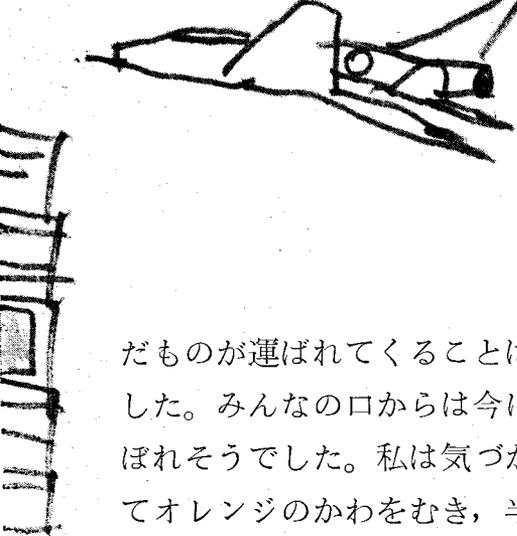
七十人最高評議会会員
ハートマン・レクター・
ジュニア

前に、私は海軍^{かいぐん}の飛行士として、大きな航空母艦^{こうくうぼかん}で働いていました。航空母艦の一回の航海は、30日くらいです。そしてひつようなものはほかの船が運んでくれます。船は私たちの航空母艦とならんで進みながら、食糧^{しょくりょう}や手紙や修理部品などをケーブルで、空母^{くうぼ}に運びこみます。ときには荷がほどけて、空母のデッキにこぼれることがあります。

ある日、私がデッキを歩いていると、ちょうどくだものの荷を運びこんでいるところに行きあいました。すると、オレンジの箱がこわれて、大きなオレンジがひとつ私の足もとへころがってきました。私はそれをひろいあげ、パイロットたちの部屋へ入って行きました。そこには私の隊^{たい}のパイロットたちがいて、船からとどいた手紙を読んでいた。

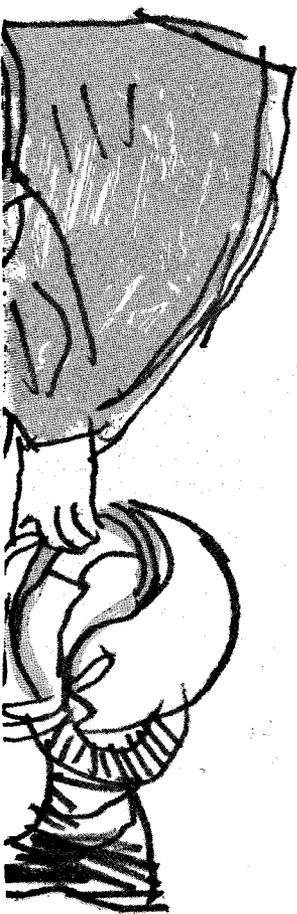
私が部屋に入ると、パイロットたちはいっせいにオレンジを見ました。新せんなく





だものが運ばれてくることは、ごくまれでした。みんなの口からは今にもよだれがこぼれそうでした。私は気づかないふりをしてオレンジのかわをむき、半分にして、いくふさあるか数えました。オレンジのふさはパイロットたちにふたつずつわたるだけありました。私が6人の仲間にびょうどうにオレンジをわけるとなかまはみんな私にお礼を言いました。

その少しあと、ひとりのなかまが部屋にかけこんできて大声で言いました。「おー



い、オレンジが1箱、^{かくのうこ}格納庫のわきに落ちて床にちらばっているぞ。」なかまたちは、いっせいに走って行きました。

しばらくすると、みんなオレンジをひとつずつ手に持って帰ってきました。そしてオレンジのかわをむき、さっきのおかえしにと言っ、おどろいたことに4ふさずつ私にくれたのです。みんながくれたオレンジのふさを合わせると、ゆうにオレンジ2個分はありました。

私は、かんたんな福音の原則を学べたことを、私のなかまに感謝しました。

私は^{むく}報いをうけようとしてオレンジを分けてあげたのではありませんでした。しかし、私たちが人に何かをしてあげるとき、それがどんな形であれ^{むく}報いがないことはないのです。聖書は私たちにこう教えています。「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」(伝道11:1) 私たちはかならずしも「多くの日」を待つひつようはありません。すぐに^{むく}報いがある場合もあります。

主は言われました。「これらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40) 主は私たちすべての者を愛しておられます。そして、その子供たちがおたがいに愛や親切やいたわりの気持を示すのを見て喜ばれます。「家庭の中に愛あらば、み神は愛にほほえみて……」(讚美歌39番)

美しい王妃

エステル

おはなし：メアリー・エレン・ジョリー

え：フィリス・ルフ

ペルシャとメデアの王、アハシュエロスは新しいおきさきをえらぼうと考えました。国中の美しいむすめたちは、みんな、きれいな着物をきせられて、王の前へつれて行かれました。

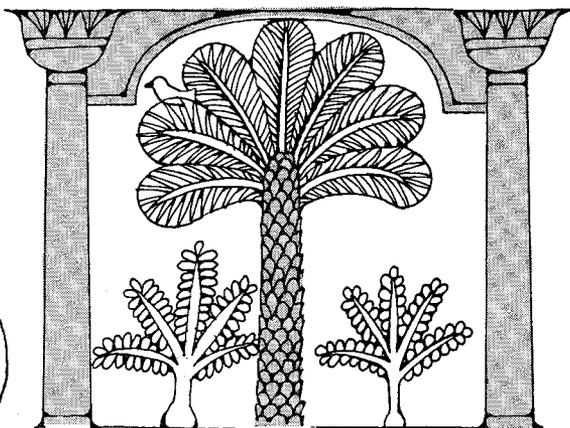
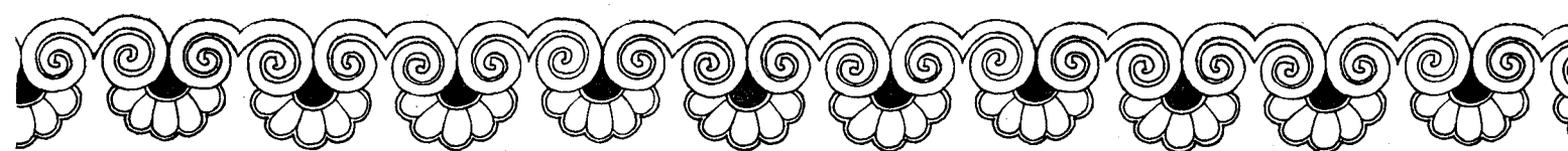
そのころ、この国にエステルという美しいむすめが住んでいました。エステルはむかしとりこになってユダヤからつれてこられたモルデカイのめいでした。エステルが王のところへつれて行かれるとき、モルデカイはエステルに、自分がモルデカイのしんせきであることもユダヤ人であることも口にはいけな^いと言って聞かせました。エステルは、両親が死んだあと、ずっとおじさんのモルデカイに育てられたのでおじさんの言うとおりにしました。

アハシュエロス王は、エステルを見たとき、エステルがとても美しいので、すぐに自分のおきさきにえらぼうと考えました。

ある日、国で一番えらい大臣のハマンがきゆうでんの門のところ^にいたモルデカイのそばを通りました。大臣のハマンがそばを通るときは、だれでもひざまずいておじぎをしなければなら^ないことになっていましたが、モルデカイはしませんでした。ユダヤのおきてではそうすることはいけ^ないことだったからです。ハマンはごうまんな男でしたから、モルデカイがひざまずかなか^ったのを見て、とてもおこりました。そしてハマンは、自分たちのおきてにしか従わず、王の法律^{ほうりつ}を守らない民がいますと王にほうこくし、その民をほろぼしてもよいというおゆるしをもらいました。

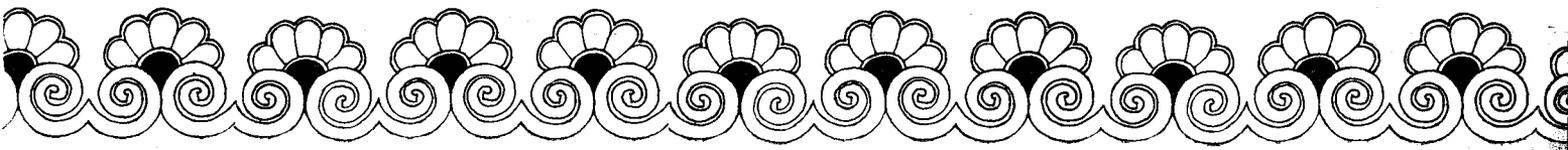


モルデカイはこのことを知り、エステルにユダヤ人を助け^てくれるように王にたのんでほしいと言いました。しかし、おきさきでも王のおめしのないときに、王の前に出ることはでき^ませませんでした。もしおめしのないときに王の前に出れば王がしゃくをのべてくださらないと、その人は死刑にされるのです。



エステルはモルデカイとユダヤ人たちに、ことがうまくはこぶように、断食とお祈りをしてくれるようにたのみました。エステルがアハシュエロス王に会いに行くと、王はおこらずエステルの望むものは何でもかなえてやると言いました。エステルは王さまに自分がひらくえんかい宴会に大臣のハマンといっしょに来てくださいとたのみました。

えんかい宴会で、エステルはわたしはユダヤ人ですと言いました。そして自分とユダヤ人たちの命を助けてくれるように王におねがいしました。そしてエステルが王にいろいろなことを話したので、ハマンが悪いことをくわだてたことが王さまにわかりました。ハマンはモルデカイを木につるして殺そうとたくらんでいましたが、自分がモルデカイをつるそうと思って用意しておいた木につるされて殺されました。



いろいろなものがかくれてますよ！

ジュディー・ケイブナー



やきゅうのせんしゅ、バケツからとびでたカエル、
むかしのじどうしゃ、うさぎ、じてんしゃ、たこ、
3とうのひつじ、とり——がかくれています。
ぜんぶみつげられるかな。

征服者

ジョン・M・テイラー

どの参考書を開いてみても、誘惑に負けることの愚かさについてはたくさん引用されているが、それをどのようにして避けたらよいかという明確な指示はほとんど見当たらない。しかし、誘惑に対して私たちの抵抗力を確実に強くしていく段階がある。

次にあげる原則は、幻覚剤の乱用、かんしゃく、不道徳な行為、過食などといった誘惑全般に応用できる。

1. そのもとと誘惑の重大さを知る

私たちはサタンが悪の張本人であると教えられているが、悪の誘惑が、すべてサタンから来ると言い切ることはできない。ヤコブは言った。「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。」(ヤコブ1:14)

ヘンリー・ウォード・ビーチャー(米国のプロテスタント牧師、著作家)は、それを次のようにはっきり区別した。「外に現われた誘惑は、その人の心の中に欲望があることを暗示する。人は『悪の誘惑はいかに強いことか』と言わずに『私は何と大きな誘惑を受けていることか』と言うべきである。」

罪や墮落は、いつもはっきりした形でやってくるとは限らない。またすべての人間に同じ方法でやってくるわけでもない。誘惑は人が攻撃されて一番弱い点を襲うものである。従って善悪を見極めにくいことがたびたびある。ジョン・ウェスレー(英国のメソジスト派設立者)の母、スザンナ・ウェスレーは、正義と不正の判断について息子に助言した。

「あなたは正しい喜びと正しくない喜びを判断して下さいね。そのとき、このことをものさしにしないで。理性を鈍くしたり、敏感な良心を傷つけたり、神様を見る目を隠したり、霊的なものを求めさせないようにしたり、体に心を支配させたり、そういうものはあなたにとって悪いものです。あなたがこのことを考えれば、どんなにひそかにもっともらしくやってくる誘惑でも、避けることができるでしょう。」

2. 証を強くする

あなたは、福音に熱心な新しい改宗者の姿をいくたび目にしたことであろうか。彼らはしばしばどんな悪をも忌み嫌う



若く健康で
力ある間に
人生を
美しいもので
満たせ



と公言する。しかし残念なことに、改宗者のその熱意は衰えることがあり、教会の中で育ちながら、熱意を自分のものにして終わる人もいる。鍵は証を得ること、そして生きた証を持ち続けることのように思われる。

証を強くするためにできることは多いが、そのほとんどが次の5段階に該当する。

- a. 神の真の属性をはじめ、回復された福音の基本原則を学ぶ。
- b. モルモン経を読む。
- c. モルモン経が真実なものかどうか、またジョセフ・スミスがイエス・キリストの福音を回復したということが本当かどうかを謙遜になって祈る。
- d. 忠実に教会の集会に出席し、(教会員は)教会の責任や召しを勤勉に果たす。
- e. 悔い改めて戒めを守る。

証はすべての物事を正しく釣合わせ、悪の力と雄々しく戦い抜く動機を与えてくれる。主イエス・キリストに対して信仰を持つとき、私たちはあらゆるものうちで最も強力な拠所を持つのである。強い証が完全な答えではない。私たちはそれでも試みられるからである。しかし証は私たちの助けになる。

3. 断食と祈り

悪の力に対抗することについて最もよく引用されるのは、おそらく「誘惑に陥りて汝の報いを失わざる様に常に祈れ」(教義と聖約31:12)という聖句であろう。救い主はこのことを重大に考えておられたので、アメリカ大陸のニューフェイス人に現われたすぐ後のあるひとつの説教で、二度も繰り返して言われた。(Ⅲニューフェイス18:15, 18)

私たちに力を与える祈りは、たいした思考もせずに行なう毎日の決まりきった祈りではない。主に受け入れられるには真心のこもったしかるべき行動の伴う祈りでなくてはならない。トーマス・セッカーは言った。「誘惑に陥らないように祈っていながら誘惑に飛び込むことは、指を火に突込んでおいてやけどをしないように祈るようなものだ。」

主は、私たちが心をさらけ出して祈り、天父にはっきりと問題を説明するように命じておられる。私たちの仲保者イエス・キリストは「人々の弱きを知り、誘惑に陥る者を救う方法を知る」(教義と聖約62:1)と言われている。アルマは息子ヒラマンに、「主イエス・キリストを信ずる信仰を以て悪魔の誘惑をことごとくうち破ること……を教えよ」(アルマ37:33)と勧めた。

イエス・キリストを信じる人、よく祈って戒めを守ろうと努力する人は、聖霊が常に伴侶となる立場にある。そのような人は、警告や促しの声を受けることができ、いったん足を

踏み込んだなら逃れるのがむずかしくなるような状態を避けるよう助けを受ける。そして、罪を経験し味わうことによってもたらされる陰うつな気持、すなわち鋭敏な感覚が鈍化していくのを自覚するようになるのである。

私たちはみたまを求めて祈るようにと繰り返し言われている。それによって、心の平安と鋭い善悪の識別力がもたらされるであろう。

4. 教会活動に積極的に参加し、安息日を堅く守る

教会の集会に出席すれば、罪から離れ、永遠の昇栄に向かって進むために取るべき道を、いつも思い起こすようになる。また単に出席するのと別に、どんなに小さくとも教会の責任を受けて奉仕すれば、ほかの人の救いのために働いているという満足感が得られる。

勤勉に奉仕して喜びが得られると、それと比べて罪の誘惑が魅力なく色あせて見えるであろう。

主はこの神権時代に、「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様」と言って安息日の戒めを与えられた。(教義と聖約59:9)確かにこれは私たちのひとつの目標であり、自分の生活に誘惑の入り込む足がかりを与えないためのよい方法である。安息日は、この世から逃れ、私たちの住むもうひとつの霊的な世の中の物事を味わう機会となる。主は、私たちが霊のバッテリーを充電させるには、7日に1日の割合が適当だと考えられた。

5. 自分を良い環境に憩わせなさい

現在、環境問題について多くの関心が払われている。しかしその主題は、私たちの吸う空気や飲む水といった物質的な問題である。それよりもはるかに重大なもの、すなわち霊的環境に関心を向けることが、個人や家族や教会にとってさらに大切なことである。私たちは、自分たちの関心事が法律的・経済的に社会の支持を受けないからといって、用心を怠ることはできない。

何年前かに、私がホーム・ティーチングをしていた若者が、仕事につけば教会から離れるかもしれないという忠告を聞かずにバーテンダーになり、彼は集会を欠席し始めた。ユタ州内での酒類計売法案を撤回させようという教会員たちの運動が話題にのぼったとき、彼は販売拡大の側についた。彼は抜け出すことのむずかしいこの世の網にかかっていた。

私たちを墮落させるのではなく、高めてくれる仲間を選ぶことが大切である。そのためには、仕事を変えたり、新しい友だちを捜したり、事情に応じて思い切ったことを実行しなくてはならないかもしれない。そのような犠牲は本当に求められているのであろうか。さらに言うてみれば、知らず知らずに自分をむしばんでいるかもしれない影響力を身近に受けながら、どんなときにも原則に忠実でいられるほど、自分は

強いだろうか？選択権のない場合もある。しかし選択できるときにどうして自分の自由意志を行使しないだろうか。私たちは選べるとしたら、汚れた空気よりもきれいな空気を選ぶに違いない。

6. 心を正しい考えの貯蔵庫として使いなさい

最近の研究によると、心はたとえ眠っている間も程度こそ違いいつも働いているとのことである。心には指令が必要である。ある点で心は体内の消化組織と似ている。良い食品を摂取すれば益になるが、害のある物をとると有害な結果を招く。ニーファイは私たちに、「キリストの言葉をよく味わえ」（Ⅱニーファイ32：3）と教えた。徳以上に、そのようなごちそうのつまにふさわしいものはあるだろうか。「絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。」（教義と聖約121：45）

聖典その他の教会の公式出版物をいつも読んでいる人は、貯蔵庫に徳を貯えて、毎日の出来事に会おう際にそこから心の糧を得るであろう。簡単な次のことを行なえば、夜中でさえも有益なものとなる。それは就寝前に聖典などの心を高める書物を読むことである。そして、ひざまずいて夜の祈りを捧げる時に、眠っている間思いや夢に多く影響を与えて下さるように願いなさい。このようにして眠った翌朝と夜遅くまでテレビを見ていた翌朝では、心の状態が全然違う。

どうかと思われる映画や本に心を消耗したら、どうして心の貯蔵庫から義しいものを得ることができるだろうか。ニューモラルと呼ばれるものに従って幻覚剤を飲んだり吸ったりなどの行為をすると、自分とはまるで違った心の貯蔵庫が生じることは確かである。またいつもあちこちと女性をながめるのが習慣の人は、心の入替えが必要かもしれない。

父と共に生命の木の夢を見たニーファイは、そのことを書いた時に、世の汚れを表わす川の水に対する父の反応についてこのように言っている。「……父は川の水のけがれを見ないほどその心をほかの物事にとられていた。」（Ⅰニーファイ15：27）これは私たち全員にとって何とすばらしい教訓であろうか。私たちの心が神についてのことやこの世の良い事物に「とられていた」ら、罪を超越できることであろう。

7. 忘れられない良い経験をしなさい

合衆国ネブラスカ州リンカーン市のある学校には、「若く健康で力ある間に、人生を美しいもので満たせ」と刻まれた美しい碑文がある。それまでの人生がさまざまな良いもので満たされていること以上に、良いことをするようにと励ましてくれるものはあるだろうか。私たちは皆新しい経験を必要としている。ほかの人々よりも多く必要な人もある。もし私たちが、心を打ち込めるいろいろな関心事や目標で自分の生活を十分に満たすならば、また、もし釣合の取れたいろいろな活動で忙しいならば（勉強や祈りや黙想の時間も入れて）、

価値のないものにふける時間はほとんどないであろう。

スターリング・W・シル長老は言っている。

「われわれの時代の特徴は、誘惑が数、種類、激しさともに増大していることである。読み、聞き、考えるほとんどすべてのものが、私たちを堕落させようとする誘惑をいくらか宿しているようである。しかし辞典には、誘惑とは「何かの願望を呼び起こすこと」と書かれている。願望は、別の方向に向けることができるのである。しかしわれわれは、悪の誘惑にあまりに心を取られすぎて、高い方へ誘うものを忘れることがある。……

実際、現代には人を良い方へ誘う刺激があって、最大の機会がそこから与えられている。われわれが誘惑に陥りやすい者である以上は、心躍らせる教養への誘い、幸福への誘い、誉むべきものへの誘い、神のようになることへの誘いに多くの思いを向けるがよいであろう。われわれには、これらのチャレンジに満ちた誘いをもっと有効に使う、神と親しむ必要がある。」（インプルーブメント・エラ」1970年6月号〔英文〕P.45）

私はかつて、更正した元麻薬中毒者たちの体験発表会に出席した。全員が共通して問題解決に役立ったと考えていたらしいことは、「高度の経験」とでも言うべきものを求める強い気持であった。そこで彼らは、以前には知らなかった満足をもたらす高度の新しい経験をしたことについて証言したのである。おそらく私たちはだれでも、関心のある高度の物事を実際に試してみる必要があるに違いない。

8. 悪の予防策として愛を実践してみなさい

神と人を愛することは、あらゆる戒めのうちで最大のものである。それには全員が含まれる。黄金律には「律法全体と預言者とかかかっている」とキリストは言われた。もし私たちがそのことを十分に理解し、実践するならば、福音の求めているものをすべて達成できるであろう。

デビッド・ダン「自己を捨てよう」と努力しなさい（Try Giving Yourself Away）」という書物の中で、小さな親切をして得られる喜びを語っている。自己をまったく捨て去るには、多少の努力と集中力が必要である。しかしそれはだれにもでき、それに費やす創意と精神力に充分みあった報いが得られるのである。例をあげると、

- 新しく来た人を、隣人や仲間になじむようにしてあげる。
- 他人から注意を向けられない人の話を聞いてあげる。
- 奉仕をしている人、それもできれば普通には努力を認められていない人をほめ、感謝する。
- 近所にいる心身障害者や知恵遅れの人たちにボランティア奉仕を行なう。

できることは無限にあり、それに充分心を用いれば不健康な娯楽の入り込む余地はなくなるであろう。

「……愛は多くの罪をおおうものである」という言葉にはジョセフ・スミスによって「……愛は多くの罪を防ぐ」というさらに靈感ある訳が与えられている。(靈感訳Ⅰペテロ4:8) 愛と尊敬に基づいた関係を開拓する人々は、お互いに利用したり、人を傷つける行動に誘惑されたりという傾向が少ない。

ここで言う愛は、聖典に用いられ、「完全な愛」とか「キリストの純粋な愛」とかいろいろに定義されている愛のことである。モロナイは、「ありたけの心をつくして」御父に祈ることによってそれが得られると言った。(モロナイ7:48) それによれば、祈りが、悪を超越できる愛を得るための鍵である。

9. 誘惑症状を打開することを学びなさい

実際に誘惑に巻き込まれたり、欲望が自分を良くない方向へ引張っていくのに気づいたときに人は何をやるだろうか。これまでにあげたことは皆役立つだろうが、このことについてはもっと直接的なものが必要である。私たちの大きな助けとなるそのひとつの方法は、気をそらすという言葉で表現することができよう。私たちが誘惑からそらし、もっと積極的なことに注意を向けさせるものは、いかなるものでも気をそらすものと言える。

十二使徒評議員会会員のボイド・K・パッカー長老はかつて、若い人たちは教会の讃美歌を選んで覚え、誘惑に遭ったときにハミングしたり、心の中で歌詞を繰り返したりできるようにしなさいと勧めたことがある。人は一度にひとつのことしか考えられないので、この方法は誘惑に遭ったとき、それを追い払うために非常に役立つことがわかっている。

大事なことは、私たちの注意をすべて集め、誘惑から完全に引き戻してくれるものを選ぶことである。ある人たちは熱中できる趣味やスポーツを持っている。確かに、スキーや水泳やバスケットをしている間に良くないことを考えるのはむずかしいであろう。

もちろん、気をそらす最も強力な方法のひとつは断食、それも特に祈りの伴う断食である。

安全運転ドライバーが共通して言う言葉は、道路上のほかの車がいつ危害を加えてくるかわからないことを認識し、危険な状態を予想して運転するという意味の「防衛運転」である。危険が実際に起きるまで何もしないで待っていては遅すぎる。正しいことを行ない、聖霊からいつも影響され、刺激されるように祈ろうと決心するだけで、大きな誘惑となる状態は見越すことができるものである。そうすれば将来を予想して備えることができる。心が強い状態にあるときに、実際

に誘惑に遭ったらどう行動しようかということのを計画しておくなさい。

10. 主の任命された指導者に従う

自分の両親から始めよう。十戒の第5番目の戒めは父と母を敬うことであり、この戒めは特に両親と共に、あるいは両親の保護下にいる間にあてはまる。人は自分が親になるまでは、両親の助言の正しさをなかなか理解できないものである。この戒めを私たちの問題に結びつけると、特にデートの問題や道徳や行動に関係する決定について両親の教えをよく聞くことは、確かに賢明なことである。

また管理する神権指導者たちによく従うのはよいことである。ほかに助言が受けられる人には、セミナーの教師や補助組織の教師たちがいる。大きな誘惑に脅かされるときには監督に相談することがとりわけ助けになる。監督は主から任命されたイスラエルの判士であり、誘惑に対して取るべき手段を教えてくれるであろう。主の代表者である監督の教えは重んじるべきである。

ほかに見過ごしにされているのは、必要なときに祝福を与えてくれる自分の父親の権威である。もし父親が按手札をするのにふさわしくなく、それだけの信仰もない、従って誘惑に対抗する祝福も与えられないと感じるならば、ホーム・ティーチャーや監督や祝福師に頼むことができる。

おそらく一番大切なのは、大会その他で話される生ける予言者すなわち大管長や教会幹部の言葉に厳密に従うことであろう。彼らの言葉に従えば、幸福と霊的な強さがもたらされる。

まとめ

予想もしないような非常な誘惑に巻き込まれるのが、私たちのめぐりあわせである。マスメディアは、20世紀の聖徒たちの遭遇する誘惑を複雑にしている。また大勢の人がオスカ・ワイルド(英国の作家)のように、「誘惑から逃れる唯一の道は、それに身をゆだねることだ」と私たちに信じさせようとする。私たちは末日聖徒として、このような思想はこの世に生きる目的をくじくものであると知っている。またこの世の誘惑に負けてしまっただけでは、生活を自分の思い通りにできないことを理解している。誘惑に対抗することは、私たちに課せられたチャレンジである。世に打ち勝ち、予言者ジョセフ・スミスの語った次のような状態に達するまで私たちはこのチャレンジを全うしなければならない。

「……人が完全に近づけば近づくほどその目は明らかに、喜びは大いなるものになり、やがて人生の諸悪に打ち勝ち、悪い望みを皆捨てるようになる。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P.51)

「教会幹部はごく普通の人でしょうか」



解答 マッコンキー長老

質 疑 応 答

これは、この世の始めからだれもが抱いてきた疑問ではないかと思います。幹部が召されたのと同じ神権の職を私たちが保持していることに強い関心を払うなら、このような質問がおきるのはごく当然のことです。

私は、迫害と苦難に満ちた教会初期の歴史から、ある出来事を思い起こします。当時十二使徒評議員であったヒーバー・C・キンボール長老は、教会の会員であるひとりの未亡人の世話になりました。その未亡人は自分のパンとミルクをキンボール長老に提供し、寝室を用意しました。キンボール長老が寝室に下がると、その未亡人は考えました。「これはいい機会（『教会幹部は普通の人なのか』という古くからの同じ疑問を明かすことのできる機会）だわ。十二使徒が主に祈るときどんなことを祈るのか知りたいわ。」そう思って未亡人はドアが閉まると、そっと上がって行って、盗み聞きすることにしました。キンボール長老がベッドに腰かける音がし、靴が床に落ちる音がしました。やがてベッドによりかかる音がして、次の言葉だけが聞こえてきました。「おお主よ、ヒーバーを祝福して下さい。とても疲れています。」

この主題について、大切に適切な事柄が幾つか言われていますが、その中から、だれにでも有益な結論を引き出すことができます。多くの人、この点について、よく誤った考えを持っています。ジョセフ・スミスの時代にも大勢の人が同

じ疑問を抱いていました。ジョセフ・スミスはこう言っています。「けさ、私は東部から来たある人に紹介されました。その人は、私の名前を聞くと、『なんだ、ただの人間じゃないか』と批評したのです。その人は、主がみこころを啓示されるのにふさわしいと思われる人は、何人か並みはずれた存在であるかのように思っていたのです。その人は聖ヤコブの語ったことを忘れていたようです。つまり、エリヤが、私たちと同じように感情に左右される人でしたが、それでも神の力を受け、祈りが聞き入れられて天は閉じ、3年と6カ月の間一滴の雨も降らせなかったこと、またさらに祈りが聞かれて、雨を天より降らせ、地に果実を実らせたということをおぼえてしまっているかのようなのでした。まったく、今の時代の人々は、このように無知なので、人が神と交われることなど信じ難いと考えています。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P. 89)

世間では一般に次のように考えています。「予言者といわれる人がいるとすれば、その人は、通常の人とは違って非常に気高く高尚な人である」と。また人々は、荒野でいなごや野蜜を食べていたバプテスマのヨハネや、「一人の野性の人出で来りぬ」(モーセ6:38)と言われたエノクのような人々を考へるかも知れません。

今日、教会の中でもこのように考えている人がいます。私たちは、その職が尊厳なもので、栄光に満ち、偉大なものであると考えています。そのような考え方の一部が、その職を保持する個人にも及んでいるのです。

この主題をもっとわかりやすく置きかえることができます。「教会幹部は普通の人なのか」と尋ねる代わりに、次のように尋ねてみましょう。「皆さんの監督はごく普通の人ですか。」答えはどうでしょうか。あるいは、もし私が「宣教師は普通の人ですか」と尋ねたら、答えは「はい」でしょうか、それとも「いいえ」でしょうか。それはすべて、人のどんな面を話すかにかかっています。人類に共通なあらゆる欠点や弱点、困難が上記の人々や私たちに臨んでくるという意味では、確かに私たちは皆人間です。しかし一方、教会幹部や監督、宣教師、またすべての教会員は、世俗的、肉欲的なものを追う人間であってはならないのです。もし「人間」という言葉が肉欲的な生き方を意味するものであれば、私たちはだれであっても「人間」であってはなりません。

私たちは教会に入るときにこの世を捨てると言明します。そしてこの世に打ち勝つことを期待されます。モルモン経には、「肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪に

由って聖徒となる」としてされています。(モーサヤ3:19)そこで、もし私たち皆が自分の持っている可能性に応じて生き、目ざす標準に向かって自らを向上させてゆくなら、だれもこの世的なあるいは肉欲的な意味での人間にはならないでしょう。ただ死すべき身を持っているということで「人間」であり、ただそのことだけなのです。

私は「教会幹部」という見出しで、拙著「モルモン教の教義」に次のように書きました。「ある教会幹部は、ひとつのことをなすように力が与えられ、他の幹部は、別のことをするように力が与えられている。すべてのことは、聖徒たちを管理する人々に常に主が課しておられる厳格な規律に従ってなされる。教会幹部が占める神権の職は、崇高なものであるが、それらの職を保持する各人は、教会内の他の兄弟たちと同様に一介の人間にすぎないのである。だから、教会員で、十分に資格があり、訓練された多くの兄弟が、もし主より召され、支持を受け、按手任命されれば、教会のほとんどあらゆる重責を担うことができるのである。」(「モルモン教の教義」〔英文〕P. 30)

さらに同じ本の「予言者」の項の中で次のように書きました。「予言者は靈感を受ける偉大な人であるが、なお人類に一般的に共通な不完全さを備えた死すべき人間である。自分の意見や偏見を持ち、靈感を受けずに自分の問題の解決にあたる場合が多い。ジョセフ・スミスは『ミシガンから兄弟と姉妹が訪れて来た。彼らは「予言者はいつも予言者である」と考えていたが、私は予言者として振舞うときにのみ予言者であると語った』と記録している。」(同P. 608)

このように、予言者でさえも、「みたま」に導かれるのでなければ、その意見や考えには誤りが含まれることがあります。靈感を受けた聖典や言葉はこのように「みたま」に導かれたものでなければなりません。しかしこのことについては問題があります。パウロは歴史上最も偉大な神学者であり、予言者のひとりでしたが、主のみこころと完全には一致していないある考えを抱いていて、そのいくつかを書簡の中に書き記しています。しかし、パウロは賢明に、思慮深く、そのような個人的見解には、「私は思うのだが」と書き足しています。またそのようにして語り終えると、「そしてこれは主の思いである」と言っています。パウロの見解や個人的意見はそれほど完全ではありませんでした。

予言者は人間ですが、「みたま」の導きによって語るときそれは神の声となります。しかしそれでもなお、予言者は死すべき人間であって、個人的意見を持ち、また持ってあたり

まえなのです。予言者は偉大な知恵と判断力を持っているので、予言者の見解は、普通の人のそれよりも素晴らしいものと言えるでしょう。しかし靈感を受けなければ、また啓示に従わなければ、予言者といえども、教会の他の会員と同じように誤ちをおかすことがあります。

私たちは、教会幹部が、「みたま」に導かれて話しているかどうかなどと、むだな心配をする必要はありません。私たちは確信を見いだすことができます。このことについて、ジョセフ・スミスが語った有名な言葉を思い出してみましょう。「十二使徒や教会の末端会員が啓示を受けるようになれば、それらの人々に啓示されないものは、いかようなものであってもジョセフに啓示されないことはない。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P.149）

まったくその通りです。パウロもこれと同じことを教えています。「ひとりずつ残らず預言をすることができる」また「預言することを熱心に求めなさい」（Iコリント14：31, 39）と言っています。すべての教会員、すべての教会組織が啓示を受けられます。啓示は選ばれた少数の宣教師や監督のためにあるものではありません。私たちは啓示を受けるようにすべきです。私たちはだれでも皆、使徒や予言者のようになるべきです。

ブルース・R・マッコンキー長老
十二使徒評議員会会員

「神権はどのように昇進するのですか」

解答 アンダーソン兄弟

提出された問題は簡単なようで大切なものだと思います。これについて、多くの人は、男子が成長してゆくにつれて、もしふさわしければ、ひとつの職から他の職へと昇進し、やがて長老から七十人、次いで大祭司になるのだと答えるでしょう。確かに私たちは、集会などで責任のある兄弟が、幾人かの兄弟をメルケゼデク神権の他の職に按手聖任する承認を求めるときに、この兄弟たちを「昇進させるという言葉に耳にします。面接がすみ、承認が得られると、たくさんの方が神権のより高い職だと考えている職に権能を持つ人から按手聖任されます。

しかし実のところ、昇進とは、余り大事でない職から一層

大事な職へ移るという意味での変化ではありません。神権の新しく、以前とは異なった責任に新たに召される、あるいは新たに聖任されるという方が一層正確でしょう。主の観点から考える限り、神権のどの職も、すべての人にとって同じように大切なものなのです。どの職を保持しているかより、どのように与えられた召しを果たしているかの方がはるかに大切なことです。

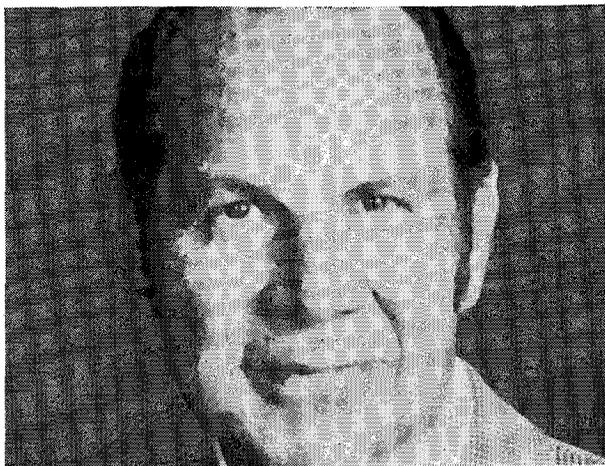
ジョセフ・F・スミス大管長はこの点について次のように言っています。

「職務についたから神権に力が加わるのではない。当教会におけるすべての職務は、神権から力、徳、権能を受けているのである。もし兄弟たちがこの原則を完全に把握するならば、教会における統治機能に関する誤解が、今よりもはるかに少なくなるだろう。今日、大祭司の方が七十人より偉大であるか、七十人の方が大祭司より偉大であるかという問題が起こっている。どちらが偉大なわけでも、小さいわけでもない私は申し上げる。これらの召しは、異なった方向を持っている。しかし、両方とも同じ神権に由来している……もし必要なら、地上に長老しかメルケゼデク神権を持つものがない場合、その長老は、神のみたまの靈感と、全能者の指示によって、イエス・キリストの教会を完全に組織することができるだろう。この長老はそうしなければならないのである。なぜならメルケゼデク神権を所有しているからである。しかし、神の家は秩序の家である。他の役員が教会の中にいれば、私たちは神権の秩序に従わなければならない。また、予言者ジョセフ・スミスとその後継者を通して教会の中に定められた秩序に厳密に従って、儀式や聖任を行わなければならない。」（「福音の教義」第1巻、P.84）

「他の役員が教会の中にいれば」ということは、神権の各職がそれぞれ特有の義務をもっているということを意味します。ですから人は、ある職が他の職より大事だとか、大事でないとかいう意味で昇進するものではありません。人は福音の知識が増すにつれ、教理に教理を増し加えてゆくのであり、神権の新しい召しを受けてその召しを十分に果たしてゆくにつれて霊的な力を得るのです。結局、神権の各職はメルケゼデク神権そのものに付属しているのです。（教義と聖約84：29, 30）

J・アンダーソン
東・ミルクリーク・ステーキ部

「結婚するのに丁度良い人が見つかったような気がします。どのようにしたらその確信を得られるでしょうか」



解答 カーチス兄弟

この質問をふたつに分けて答えたいと思います。

1. 皆さんは、オリバー・カウドリが、ジョセフ・スミスと同じように翻訳したいと願ったことを御存じでしょう。主はオリバー・カウドリにそのことをお許しになりました。主から翻訳する「許し」を得た後に、自分にはその力がないことを知ったときのオリバーの失望を想像してみてください。

オリバーに対する主の答えは教義と聖約第9章に見られます。「見よ、汝はまだ悟らず。汝はひたすらわれに願ひし時はこれを与えらるるならんと思えり。

されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず、願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」(教義と聖約9：7-8)

多くの人が、ただ求めさえすれば主はその問題に答えてくださると考えています。しかし主は、私たちが問題について考え、少しでも知的に探求するよう望んでおられます。そして、その結論が正しいかどうかを主が私たちの心の内を燃やして示して下さった後に、私たちが自分で決定するよう望んでおられます。伴侶を求めたり、ほかの決定をするのにも同じ原則が適用できます。

2. 「はい、私は折りました。そしてこの人は私にとって

良い相手であるという答えを得ました。それなのに一向にうまくいかないのです。私たちの結婚は失敗でした。なぜでしょう」と尋ねてくる人がいます。多分それは、良い相手を得ることが結婚のすべてであると考え、さらにその結婚を成功させようと努力を払わないことから当然起きてくることなのです。

幻滅を覚えているある男性に、妻に愛していると言ったことがあるかどうか尋ねてみました。その人は「はい」と答えました。そこで次に、「奥さんに愛の言葉を語ったのは最近ではいつでしたか」と尋ねると、「結婚した頃です。私が愛していることを妻は知っています」との答えでした。そこで私は、「おそらく奥さんは知っているかも知れませんが、でも毎日何度でもそのことを聞かないと、奥さんはあなたが愛してくれているのかどうか心配なのですよ」と言いました。

「ふたりは結婚したので、あとはずっと幸せにやってくだろう」という言葉は、非常に誤って用いられています。もっと正しく言うなら、「ふたりは結婚し、家庭生活を始めたので、幸せにやってくだろう」ということなのです。

主に機会を与えて下さい。あなたにとって彼が、あるいは彼女が、良い相手であるかどうかを主に尋ねる代りに、自分が正しく決定できるよう助けを求めて下さい。あなたの相手を吟味し、自分と相手の好きな物やきらいな物、特質、長所、短所を調べて下さい。時間をおき、一歩下がって、ふたりと一緒に生活し、働き、喜びと同様悲しみも共にできるかどうかよく考えることです。

相手の男性が、父親として誇れる人かどうかを考えて下さい。あなたの子供たちも彼を父親として誇れるかどうかを考えて下さい。家族の頭である神権者として立ち、あなたや子供たちに日の栄光の王国への道を示し、導いてくれる人かどうか判断して下さい。

相手の女性は、あなたが家族の頭である神権者としてよく努力するときに、あなたを支えてくれる妻であり子供の母親であるかどうかを考えて下さい。

結婚は、人生の尽きることない階段へ通じる門を開けたに過ぎないものです。しかし、ふたりが共にその階段を昇り続けるなら、あなたがたは強められ、階段をさらに容易に昇れるようになるでしょう。それは、他人への愛を増すことによって、信じ難い力を得られるからです。

医学博士 リンゼイ・R・カーチス

ウェーバー・ステイト・カレッジ・ステーク部高等評議員

「あなたはどのようにこのようなことをなさるのですか。私は十分成長してきたではありませんか。」

あなたがたは時として「主は、私がどうあるべきか本当にご存知なのだろうか」、「私の方が主よりも、自分が何をなすべきか、そして何になるべきかよく知っているのではないだろうか」と思うことがあるかもしれない。私は今、これまで何度も教会で話してきたひとつの話をしたい。この話はあなたがたが生まれる以前のものである。これは私の人生で実際にあったことであり、それゆえ数多くのステーク部や伝道部で話してきたことである。私はひとつの出来事を通して、主がだれよりもよくご存知であることを学んだ。

当時、私はカナダに農場を買って住んでいた。しかし、その経営はあまり思わしくなかった。ある朝外に出てみると、すぐりの木が目に入った。手入れをしない間にその木は2mほどの高さまで伸び、まるで林のように繁っていた。しかし花は咲かずひとつの実も結んでいなかった。私はカナダに来る前にソルトレークで果樹園を経営していたので、何をすべきかよく知っていた。そこで私は刈り込みばさみを捜してすぐりの木の枝をおろし、木株がほんの2、3本しか残らないまでに刈り込んだ。終わったのは、昼も近い頃であった。切り株の切り口ひとつひとつには涙がたまっているように見えた。すぐりの木は泣いていた。

私はうぶな性格なのかもしれない。(そしていまだに脱却できないでいる。)私はすぐりの木をながめ、ほほえんで言った。「何をそんなに泣いているのかね。」私たちはまるで話をしているようだった。すぐりの木が話しているように聞こえた。「あなたはどのようにこのようなことをなさるのですか。私は十分成長してきたではありませんか。垣根の内側にある日よけの木や果樹と同じ位に大きくなっていくのに、あなたは私を切ってしまいました。庭の木はみんな私を見おろすでしょう。私はもっと大きくなろうとしていたのに、それができなくなってしまいました。どうしてあなたはこのようなことを私になさるのですか。私はあなたがこの庭師だと思っていたのに。」よくよく考えて私は答えた。「かわいいすぐりの木よ、私はこの庭師だ。私は目的を持っておまえを植えた。それはおまえを果樹や木陰をつくる樹にするためではない。私がおまえを植えた目的は、おまえをすぐりの木にするためだ。いつかおまえが実で枝もたわわになったとき、私に感謝して言うだろう。『本当にありがとう。あなたは私を愛して下さったからこそ枝をはらい、世話をするために刈り込んで下さったのですね。私は感謝しています』と。」

それから何年後、私はイギリスに来て

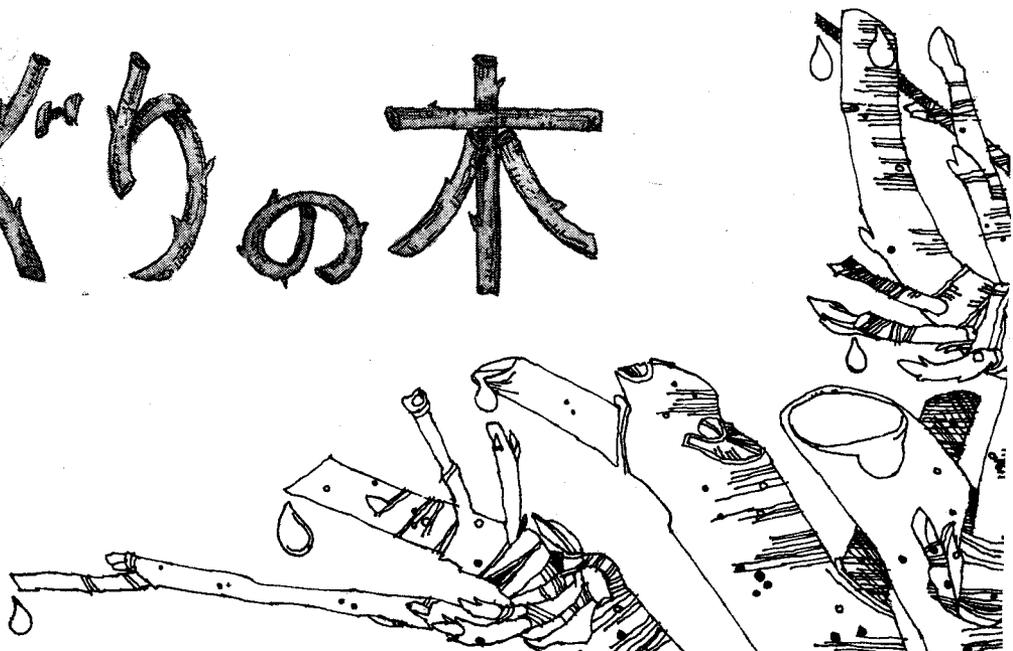
いた。私はカナダ陸軍の部隊で指揮をとっていた。異例の昇進をし、英領カナダ陸軍の将校であった私は、自分の階級を誇りに思っていた。そのとき将官になるチャンスがあり、私はすべての試験を受けた。そして私には先任権があった。とうとう、この10年来望んできた将官に、あと1回の面接を残すだけとなった。それは英国陸軍の将官との面接であった。私は誇りで胸がいっぱいになった。しかしこの将官が災いとなった。私はロンドンからの電報を受け取った。「アスアサ10ジ、シュットウセヨ」電報はカナダ全軍司令長官ターナ將軍の名前だった。私は従者を呼び入れた。そして彼に、ボタンをみがき、帽子と靴にブラシをかけ、私が将官にふさわしいような姿にさせた。私は将官になるはずであった。私の従者は命令を忠実に守り、できる限りのことをしてくれた。私はロンドンへ向かった。私はきびきびとした歩調で歩き、將軍の部屋に入り、將軍にきちんと敬礼をした。將軍は故參の将校がいつもするような「下っ端め、早く出て行け」というような調子であいさつした。「腰掛けなさい、ブラウン」それから彼はこう言った。「残念だが、将官に任命することはできない。君には將軍になる十分な資格がある。試験はすべてパスしている。先任権もあり、優秀な士官であった。しかし任命することはできない。君はカナダに戻って、教育将校か輸送将校になるとよい。だれかほかの者が将官になるだろう。」10年間、私が希望し祈り求めていたものが、突然砕かれてしま

すぐりの木

十二使徒評議員会会員

ヒュー・B・ブラウン

絵：リチャード・ハル



った。

そのとき別の部屋で電話がなり、彼が出て行ったので、私は机の上に置いてあった書類をそっと見た。私の経歴書だった。右下を見るとブロック文字ではっきりと「この男はモルモンである」と書いてあった。当時私たちモルモンはあまり好まれていなかったのである。それを見たとき、任命されなかった理由がわかった。私は英国陸軍のモルモンの中で一番高い地位についていたのである。彼は戻ってきて、言った。「それだけだ、ブラウン。」私は彼にもう一度敬礼をした。しかしきちんとではなかった。私は義務で敬礼をし、そして部屋を出た。汽車に乗り、200キロほど離れた町へと引き返した。私の心はひどく傷つき苦々しさばかりが残っていた。車輪がレールの継ぎ目で鳴る響きは、まるでこう言っているかのようだった。「おまえは落伍者なのだ。町に帰ったらおまえは臆病者と呼ばれるだろう。モルモンの少年たちを募って軍隊に入れたおまえが、今こそ逃げていくのだ」私は町に戻ったとき受けるものを予期していた。テントに着いた私は、あまりの苦々しさに、帽子とサドルをベッドの上に投げ捨てた。こぶしを天に向かってふりあげ、叫んだ。「神よ、あなたはどのようにこのようなことをなさるのですか。あれほど努力してきたではありませんか。私が必要なことはもう何も残っていません。私が必要なことはすべてやりました。それなのに、どうしてこのようなこと

を私になさるのですか。」はずかしさとかやしさで胸がはり裂けるようであった。

そのとき私は声を聞いた。その声がだれの声かすぐにわかった。それは私自身の声だった。その声がささやいた。「私はこの庭師だ。私は目的を持っておまえを植えた。」心の中からあの苦々しさが消えていった。私はベッドのそばにひざまずき、心に抱いた不満と不敬の念について赦しを求めた。ひざまずいているとき隣のテントから主を賛美する歌声が響いてきた。大勢のモルモンの少年たちは毎週火曜日の晩に集まり、私はいつもそれに参加していた。私たちは床に座り、MIAを開いていた。ひたすら赦しを求めて、ひざまずいて祈っているとき、彼らの歌声を聞いたのである。

「山の上や荒れる、海を越えゆき
また戦の場にも 主は召したまわん
わが知らぬ道へと

呼ぶ声小さくも

主によりこたえつつ

みむねのまま行かん」

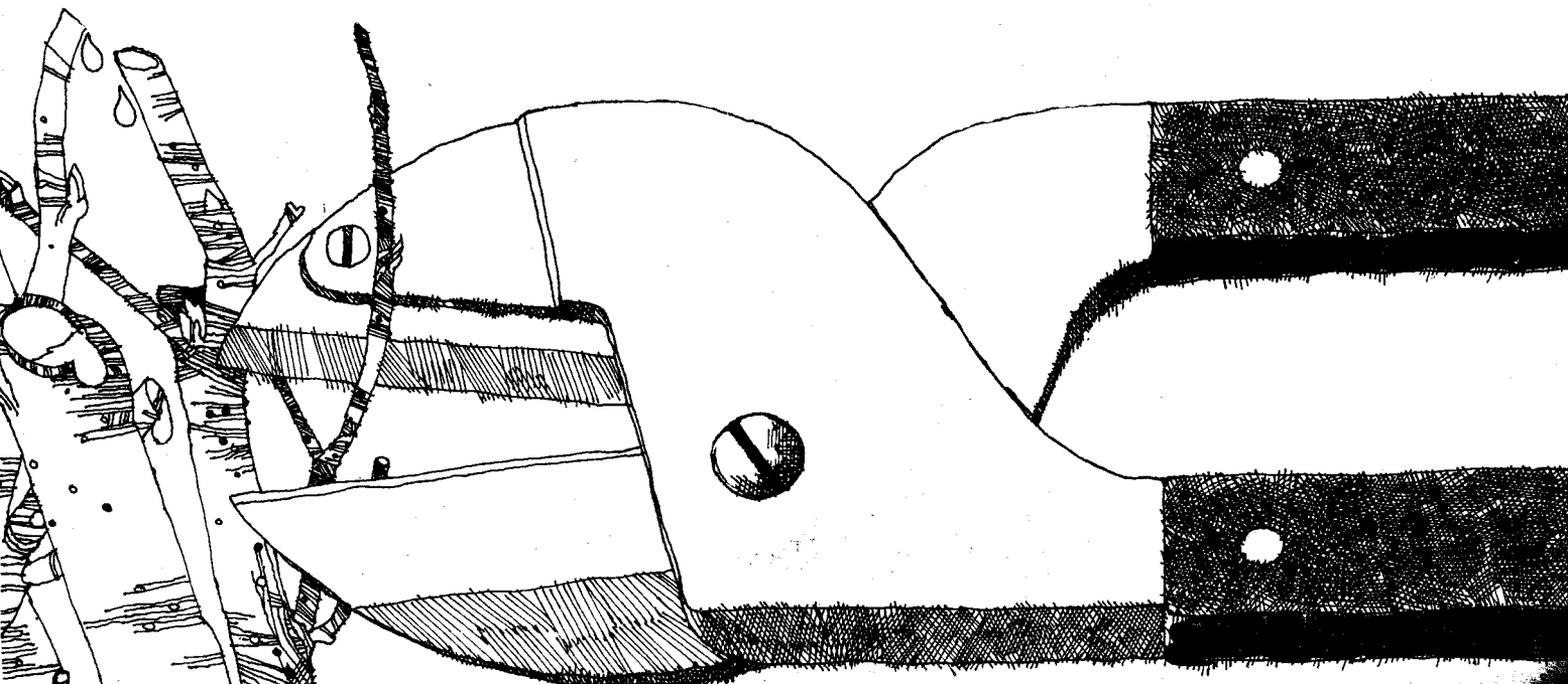
(讃美歌 100番)

立ち上がったとき、私の心は謙遜な気持ちで満たされていた。あれから50年の歳月がすぎた。今、私は主を仰いでこのように言うことができる。「本当にありがとうございます。あなたは私を愛し、枝をはらって刈り込んで下さったのですね」と。当時、私が将官にならなかったのは賢明なことだった。もし任命されていたら、私はカナダ西部方面の高級将校として生涯十分な給料と家を支給

され、働けなくなったら恩給が支給されたであろう。しかも6人の娘と2人の息子を基地で育てることになっていただろう。そしてきっと子供たちは教会外の人と結婚していたに違いない。その結果、私ができるものは無に等しかったであろう。現在でも私は大したものではない。しかし、私の望み通りに主がかなえて下さっていたら、現在のようにはなっていないであろう。

私はこの何度も語った話をもう一度話してみたいと思った。それはあなたがたが将来、落胆、失意、死別、敗北という非常に困難な問題にぶつかることがはっきりしているからである。あなたがたは誠に遭いあなたがたの得たものを証明しなければならぬ。私はあなたがたに次のことを知ってほしいと思う。あなたがたが当然受けるはずであるにもかかわらず、それを受けられないとき、このことを思い出してほしい。「神は庭師であり、あなたがたが植えられた目的をご存知である。」神のみこころに従いなさい。神の祝福を受けるにふさわしくありなさい。そうすれば祝福を受けることができるであろう。

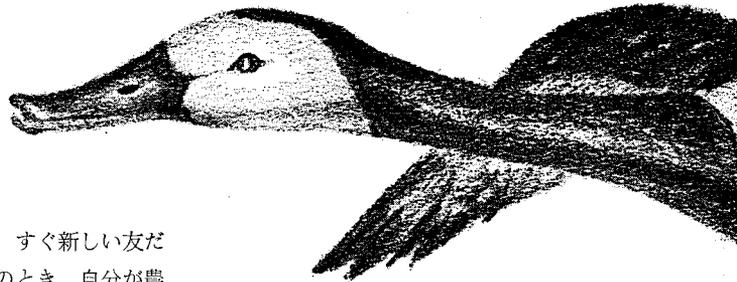
今月号以後、既刊書「教会幹部による話」から新シリーズを紹介できるようになった。これまで長年、教会幹部は聴衆の心に触れ、行動を変える、すばらしい話を語ってきた。しかもこれら多くの感動を呼ぶ物語は、彼ら自身の生活や友人や知人の生活から題材をとったものである。その感動は今日でも、それが語られた当時と変わりが無い。これらの話を掲載するにあたって、著者諸氏より許可をいただき感謝する次第である。



雁の話

マイケル・D・パーマー

絵／ライフ・レイノルズ



昔、一羽のまだ若い雁がいました。毎年この雁は年老いたお父さん雁と南へ飛んでいました。たいへん長い旅でしたが、旅の初めの頃は景色を見るのに夢中でした。しばらくすると、年老いてスピードの落ちたお父さんのまわりを飛ぶことが楽しみになりました。お父さんはゆっくりではありませんでしたが、いつもコースを真っすぐ飛んでいました。そんなことがあっても、若い雁には何から何まで楽しい旅でした。

その年南からの長旅が終わって間もなく年老いたお父さん雁は自分の痛んだ翼をなでながら、旅について最後の指示を息子に与える時がきたと感じました。お父さんは非常に口数の少ない雁でしたが、息子呼び寄せてゆっくりと話し始めました。

「冬は南が一番安全だ。毎年葉が黄色くなり始めたら、南へ出発すればよい。」

「でも、南へ行く道はどうするの？」そのとき、若い雁は今まで飛んできたコースにあまり注意を払っていなかったことに気がつきました。

お父さん雁は「聞きなさい」と答えました。次に何か言おうとしましたが、やめました。

若い雁はすぐお父さんに何を聞くのか尋ねようと思いました。でもためらいました。お父さんがその一言を答えるときの、深く考え込んだ真剣な顔を見たからです。そして何を聞くのか尋ねる前に、年老いたお父さんは静かに息を引き取りました。多くの雁は悲しみました。ただ、お父さん雁の飛んだコースが正確なのは、雁として知っておかなければならないことをよく勉強していたからだということはわかりました。

若い雁は、ひとりさびしく取り残されたので、新しい友だちをさがそうとしました。彼は若くてハンサムで、ちょうどおと

なになりかけていたので、すぐ新しい友だちができました。でもそのとき、自分が農家の庭先で飼いならされて世間慣れた雁のお気に入りになっていることに気がつきませんでした。彼がみんなから田舎者のように仲間はずれにされているときでも、彼の長く強じんな翼は、胸毛が雪のように白い若い雁たちの群れの中でひときわ目立っていました。その年の夏は新しい経験でいっぱいでした。最近流行のダンスまで習いました。

ある日、友だちの雁たちと外泊をして、次の朝起きてみると、葉の色が変わり始めていることに気がつきました。

「あす、出発しよう。」そう考えたとき、彼は少しどきどきしました。でも、お父さんの息をひきとるときの真剣なようすを思い出し、やはりあす出発することにしました。出発の最後の準備をしているとき、あやまってとなりに寝ている雁を起こしてしまいました。

「ねえ、どこに行くんだい？」と友だちの雁は眠そうにたずねました。

「南さ。」若い雁は答えました。

「だいぶ遠くまで行きそうな感じだけど。本気かい？」

「ああ、本気さ。きょうたつよ。」

「でも、なんでそんなことするのか？ここには年中、仲間がたくさんいるし、結構うまくやっているじゃないか。翼をほんの少し切るだけでぼくたちの群れに入って、冬の間はえさを捜さなくても満腹でいられるんだよ。君がいることなんかだれにも見づかりはしないよ。」

「確かにうまい話だな」と、若い雁は言いました。彼はそれを本当にうまい話だと思っていました。「しかし、翼を切られるのはどうかなあ。」

「うん、最初はほんの少し切るだけさ。すぐ気にならなくなるし、短い翼の方がかえって便利なときもあるよ。」

「そうかもしれない。でもぼくはやはり行くよ。」若い雁は答えました。

「どうしてそんなに急ぐんだい？ここにきて話しなよ。本当の理由は何なんだい？南ではきっとかわいい恋人が待っているだろう」と友だちの雁は続けて尋ねました。

若い雁はウインクをして、その友だちに納得させようかと思いましたが、でもそうせずに、ためらいがちに一言いいました。

「冬は南が一番安全なんだ。」

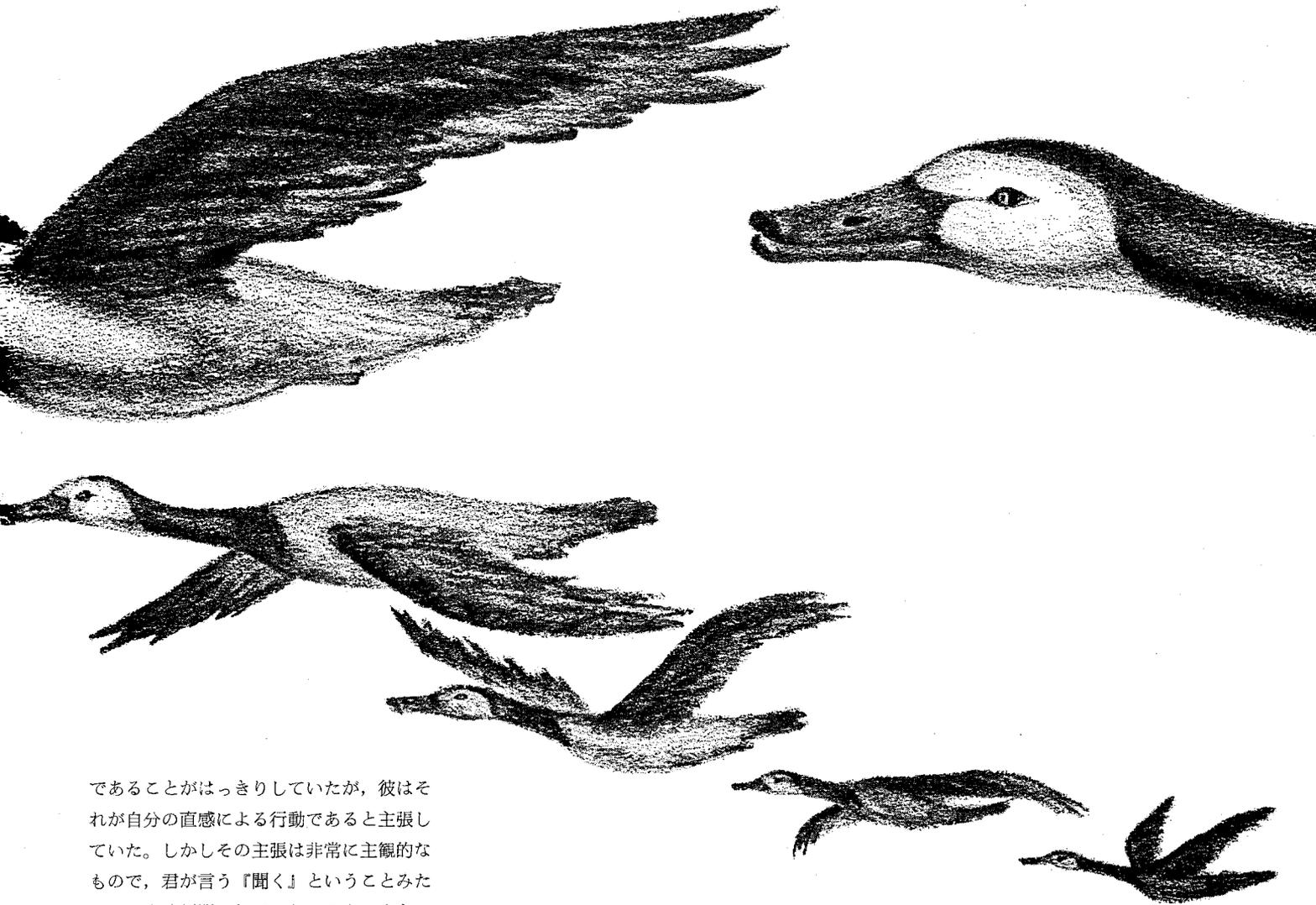
「何だって？もっとまじなことが言えないのかい？」と友だちの雁はわざとらしく言い返しました。「それは古い迷信だよ。ぼくを信じなよ。結構ここでもすごいぼうけんはできるんだよ。それに、遠くへ行って、君ひとりで道を探せると本気で思っているのかい？」

「できるさ」と若い雁はなるべく自信ありそうなそぶりでもう答えました。

「でも、飛んで行く方向をどうして決めるつもりだい？」と友人は少しばかにしながらたずねました。

「聞くんよ。聞いて飛ぶつもりだ。そうすればきっとうまくいくよ。聞くことは君も知っているだろう。」若い雁ははっきりと答えました。しかし一言話すたびにくやしさが増してきました。

「そいつはいいや。でも、そんなこと本気で信じているとは思わなかったよ。最近旅についての本を読んだが、その中で年老いたいなかが渡り鳥の習性について語っていた。以前からそれは単なる自然の現象



であることがはっきりしていたが、彼はそれが自分の直感による行動であると主張していた。しかしその主張は非常に主観的なもので、君が言う『聞く』ということみたいに、十分証明されていないのさ。まあ、古風でおもしろいことにはおもしろいさ。でも本当に不思議だ。こんなことを実際に信じている者にお目にかかるとは夢にも思わなかったよ。」

「いや、ぼくは確かにそれが効果のあることだと信じるよ。お父さんはぼくがその声を聞くなら……」

「じゃ、それでもいい。今かりに、本当にそのような声というようなものがあつたとして。それで、どうして君のお父さんだけに聞こえたんだい？ どうしてここにいる連中にはだれひとりそれが聞こえなかったのだろうか？ みんなに聞こえないのに、どうしてお父さんだけが聞くことができたんだい？」

「それはたぶん父の方が君たちよりもその声を必要としたからに違いない。父は毎年南へ行くコースを見つけなければならなかった。この連中はだれも速くへ出かけたことがないじゃないか。ところで君もそ

の声を聞かないといけないよ。」

「まあ、お父さんなしでめくら同然に飛んで行けばいいさ。もしぼくだったら、そんな自分のまわりしか見えずに飛ぶ旅に出発する前にはもっとよく考えるぜ。旅はまわりの景色を見比べながらするもので、声というようなぼんやりしたものをあてにしちゃいけないよ」と友だちは言いました。

「ご忠告ありがとうございます。」若い雁は自信なさそうに答えました。彼はそのことについて2度考えました。ところが2度目にそれを考えていたとき、彼は何かを聞きました。かすかでしたが、はっきりと聞き分けることができました。そのとたん、希望が胸に満ち、雁は飛びたちました。地面を離れたとき彼はほっとしました。

最初はあまりよく聞くことはできませんでした。しかし次第によく聞こえるようになり、ついに厚い雲も全く気にならないまでになりました。

その声を聞いたとき、父がなぜあのような不十分な説明しか残さなかったのかわかりました。彼が経験したものは単なる「声」とか「感覚」というものではありませんでした。それは「声」や「感覚」が与える以上の確信をもたらすものでした。彼がそのことについて言えることは、確かにそれは賜物であり、善いものであり、目的を持って与えられるものだということです。

次の春、彼が戻ってみると、彼の友だちはクリスマスのときにどこへともなく消えてしまったそうです。その年以來、若い雁はまっすぐ飛ぶことをよく研究して、ついにはお父さん雁のように、本当にまっすぐ飛べるようになりました。

教訓：遠くまで見えなければ耳をすましてみなさい。

北アイルランド

ハーバート・F・ミュレイ



上、ベルファストのスプリングフィールド街における暴徒
下、路上で争う若者
左、英国軍隊に規制されて行進するデモ隊

高邁な教理を掲げながらも敵対するふたつの宗派、しかも共にクリスチャンである宗派が、何百年にもわたってこの地で対立してきた。この戦場における主の御業は、どうなっているのだろうか。北アイルランドの怒り狂う敵意と苦悩の中から、一体どれだけ霊的な成長が期待できるというのだろうか。

アイルランド伝道部長のクライド・J・サマーヘイズは最近、アルスターでおきた暴動と、それが当地の末日聖徒にどのような影響を与えてるかを次のように報告している。

「伝道の成果は、一体紛争があったのかと首をかしげさせるほどの調子で前進し続けている。長老たちは、紛争地区で危険を感じると、そこを立ち去って身の安全を守っている。彼らは強くて勇氣ある素晴らしい主の代表者である。」

多くの人々は、宣教師が家を訪れてみると安心感を抱くようだと、サマーヘイズ伝道部長は述べている。モルモンの宣教師が家にいたために、数軒の家庭が放火を免れたという報告が入った。

交通の便宜がベルファストの深刻な問題となっている。バスの運行はまちまちで、乗り物はハイジャックの格好の場であり、交通機関全体がしばしば全面的にストップすることがある。

多数の会員は、勇敢にもバリケードをすり抜け、街を徒歩で通り抜けて集会に参加する。その結果、市街の危険にもかかわらず教会の集会参加者数は依然として上昇し続けている。銃声や爆弾の炸裂音があまり激しいために、集会を一部とりやめにする 것을考慮したことも幾度かあったが、そのことのために断食と祈りをした結果、主は危険をかえりみずに御業を前進させるこ

とを望まれているとの結論に達した。バプテスマの儀式さえも、毎週3カ所の教会でとぎれることなく行なわれているし、それ以外の場所でも必要に応じて行なわれているのである。

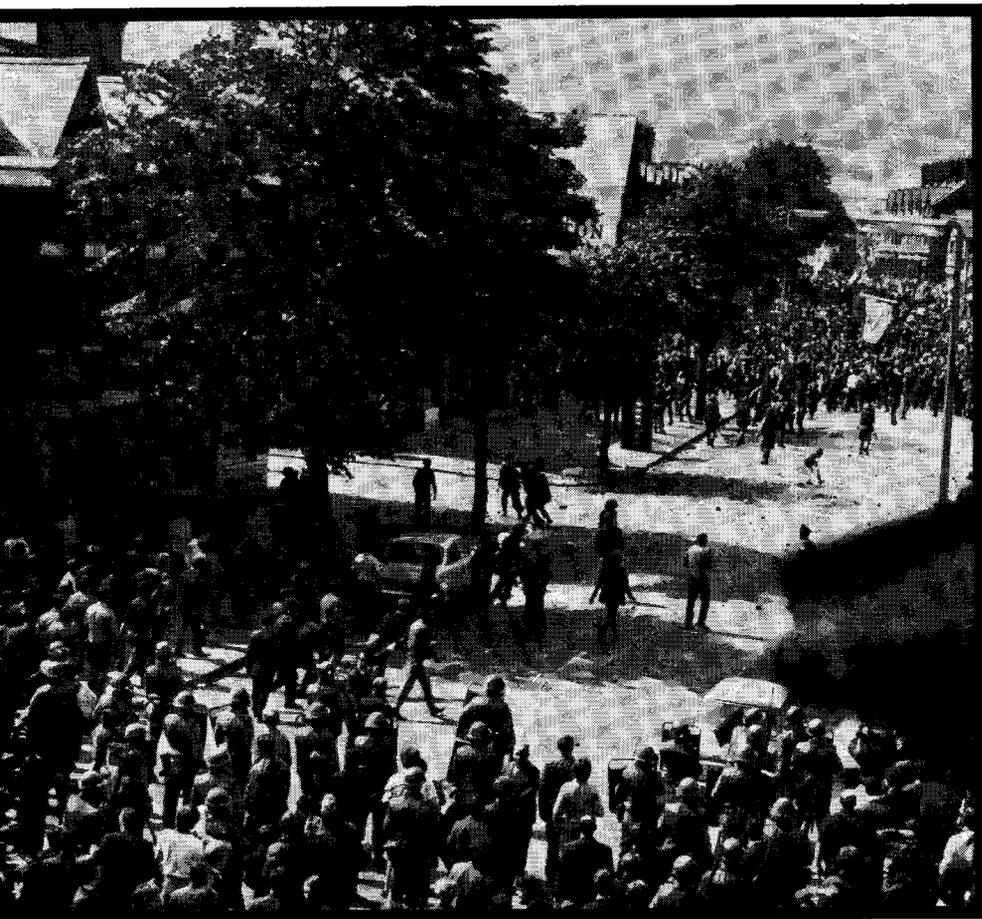
「私たちは、アイルランドの聖徒たちの忠誠と信仰のおかげで、非常に心暖まる霊的な集会を開くことができている。」サマーヘイズ部長はこう報告している。

「アイルランドは世界で最も美しい所である」とも彼はつけ加えた。「見るに美しく、住むに美しい所である。ありのままの姿を見る者にはだれにも喜びと幸せをもたらしてくれる。」

「しかし暴動が続くにつれ、一部の人は失望してアイルランドが自分たちや子供たちに多くの機会を与えてくれるかどうか疑問を抱き始めている。ある者はアイルランドを去り、故郷の美と偉観と友情を捨てて、代りにこれらのものをはるか遠くカナダ、ニュージーランド、オーストラリア、合衆国あるいはどこか他の所で見つけようとした。にもかかわらず、すでに多くの人が帰国している。早晩もっと多くの人が戻ってくるであろう。」

第一副伝道部長ダーモット・シェイルズは、宣教師が成功を収めているのは、大部分信仰箇条、中でも第11条と第12条の原則に従ったためであるとしている。すなわち、11条「われらは、自らの良心に従い、全能なる神を礼拝する特権ありと主張す。また、われらは、すべての人々にこの特権を許し、何所なりとも、如何様なりとも、または何なりともこれを礼拝することを妨げず。」そして次の12条である。「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」

シェイルズ兄弟はこう言っている。



英国軍隊に囲まれてスプリングフィールド街を行進するプロテスタント

「このふたつの信条は、すべての聖徒にとって非常によい手引きだった。わずかな例外を除いて、当地の教会員は改宗者である。人を単にどの宗派に属するかということで判断する昔からの伝統は、会員が福音の中で成長するにつれ過去のものとなりつつある。当地の末日聖徒も他の市民と同様、テロリストの活動から市民を守るために政府が課した、交通の混乱、検門と規制に巻き込まれている。」

伝道部長会は、支部や地方部にすべての集会を予定通り行なうよう奨励する方針を取っている。他方、町も壊されたショーウィンドーに看板や段ボールを貼りつけ、そこに、「平常通り営

業」の看板を掲げて、同様の決意を表明している。

「神の御業を行なっているのです、私たちは神の御加護を期待し、また実際に受けることができるのである。」こうシュイルズ兄弟は語っている。「この姿勢が、聖徒を励まし団結を築く上で成功をもたらした。」

「教会は、この状況下において数々の恵みを得ている。」アルスター第一副地方部長アンドリュウ・レンヒューは報告している。「現在所属している教会の教えに幻滅した人々は、真理を求めて私たちの教会に目を向け、そして実際に見いだしている。教会員は、以前にも増して尊敬を集めている。と

いうのは、会員がどちらの陣営にも属さないという異例な立場をとっているため、どちらの側からも助けや忠告を求めに近づきやすいからである。」

「今日ベルファストに住み、世界の注目を集めることが、別な面で人々に影響を与えている。」レンヒュー副地方部長は続けて言う。「一部の者が舞台の照明を浴びる一方、他の人々は自分たちの地方の問題が、世界中にパッと報道されたことに幾分とまどいを感じている。ベルファストの人々は、もちろん平和に暮らすことを望んでいる。危険や争いを避けて日常活動をしたいため、当然であるが、今の状況が存在する以上、それに直面しなければならず、悪条件を取り除くために、万全を尽くさなければならないのである。」

「ビジネスマンや女子社員、店員たちの功績は高く評価しなければならない。彼らはベルファストの心臓部を日々脈打たせるために、自分たちの建物が爆弾的に選ばれる可能性があるにもかかわらず、事務所に通勤しているのである。結局ベルファストや北アイルランド全土を、この困難な時代から救うのは、この決して消えることのない、不屈の精神であることに疑いはない。」

「一般に教会員は、日々問題に直面しながらも前進し続けるために思いをひとつにしている。会員は、神の御業が前進しなければならないことを知っている。特に敵が一段と活動を強めている現在、これまで以上に励まなければならないことを承知しているのである。当地の指導者と教会員の間に見られる思いは、神に対する信仰を持ち続け、神の戒めを守り、でき得る限り警戒を怠りさえないならば、宗教活動において祝福され、早晚平和を勝ち得るだろうという確信である。」

モルモン ユーモア

グリーンビーン（新任）のW長老、習いたての日本語を使うチャンスを虎視たんたんどねらっておりました。そして初めての戸別訪問の日、先輩のM長老にせがんでひとりでコンタクトすることになりました。W長老、喜びいさんである家の玄関に入り、黄金の質問をしたまではよかったです、けげんな顔をしていろいろ尋ねる奥さんに面くらってしまい、とっさに口をついて出たのが、いやはや彼がおぼえた最初の日本語でした。「ドーズ、コノショクモーツラ、シュークフークシテグサイ！」

ある日曜日——日曜学校の始まるほんの少し前、2分半の話をする事になっていたことを思い出しました。大急ぎで最新の聖徒の道をわしづかみにすると集会場へと走り出しました。でも、私はあまりあわてませんでした。というのは、本の中からいい話を選んで、さも自分で準備したように話す能力には自信があったからです。本の中から絵がたくさん描いてあるページを選びました。しばらくして私は、みんなの前に立っていました。すべての人は感動的な物語にすぐ引き込まれました。そして話がクライマックスに至ろうとした時、読んでいた私の目に最後の3文字が飛び込んできました。——「つづく」

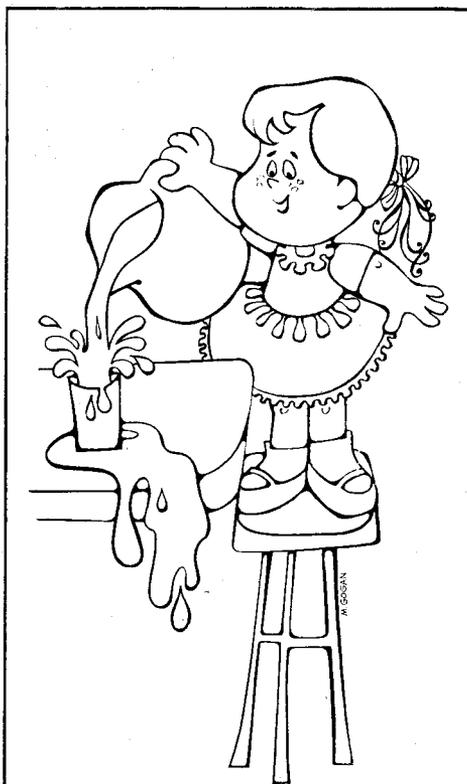
カレン・スミス
ネバダ州カリエンテ

ふたりの青年がホーム・ティーチングの記録について話し合っていた。

「僕はいつも月の最初の日にやるんだぜ。」ひとりの青年が自慢した。

「なんの！どうってことないさ。」他のひとりが言い返した。「僕は、いつも君のやる1日前にやってるよ。」

エライン・ハルトスロトム
カリフォルニア州ラシラダ



小さな妹がコップにミルクを注いでいました。そしてふち一ぱいになっても注ぎ続けてとうとうミルク入れを空にしてしまいました。お母さんが何をやっているの、と尋ねると、こう言いました。「ええとね、はやく入れたら、ミルクを全部コップに入れられると思ったの。」

ジュディ・スパックマン
ユタ州トレントン

ある家族が家庭の夕べを開きました。アダムとイブについてのレッスンでした。お父さんが男の人のあばら骨から女の人がつくられたことを説明しました。

リフレッシュメントが出された後、小さな男の子のうちのひとりがおなかを痛いと言います。そして、家庭の夕べのレッスンを考えながら言いました。「お父さん。僕にお嫁さんができるみたいだよ。」

カート・ベンチ
フロリダ州トラハシー

デザートとしてケーキが出されました。順に皿がまわって、最後にふたりの宣教師のところに来た時、残ったのは大小ひとつずつでした。先輩宣教師が大きい方を取り、皿を後輩にわたしました。

後輩が問い正しました。「君はそれが正しいことだと思うのかい？ 僕に選ぶチャンスがあるなら小さい方を選ぶね。」

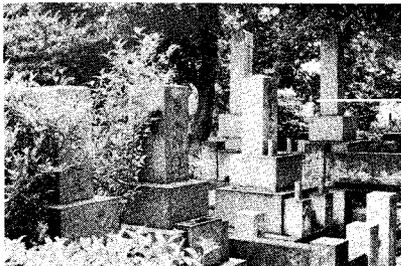
先輩がさも当然のように答えました。「だろう、選ぶチャンスを君にあげたのさ。」

リン・グリーンウッド
ユタ州プロボ

ステーキ部大会で、5歳位の男の子と母親が前列の方にすわっていました。母親は集会の間中、ずっと力づくで子供を静かにさせようとしていましたが、ついに立ち上がり、子供をかかえて出て行きました。彼女の顔には絶望の色が見られました。男の子の顔にも同じように絶望の感がありました。彼は次に何が起きるかを知っていました。ちょうどふたりがドアまで近づいた時、少年は振り向きさまに叫びました。「助けて。監督、助けて！」

ウェンディ・カーティス
アイダホ州キンバリー

…いざわれら一教会員として、一人の民として、また末日の聖徒として、義しきに適う捧物を主に捧げん。またいざわれら、主の神殿の完成せる時、その中に於て、主が完全に受け入れたもう価値ある、われらの死者の記録を載せたる一冊の書を主に呈せん。（教義と聖約 128：24）



私の証

霊界にいる

人々のために

児島三枝子
八王子支部

3年前のこと、私は結婚し、仲の良かったある姉妹は宣教師として九州の地へ遣わされました。その後私は2児に恵まれ、家事と育児に追われて毎日を過ごしてきました。神権者である夫を助け、子供を立派に育てること、これが私のなすべき最も大切な務めであることはわかっていました。けれども伝道に出た姉妹が九州の地で多くの素晴らしい経験や強い証を得ている姿を思うたびに、私の心に「私には一体何ができるのかしら」という思いが湧くのでした。そして真剣に主のみこころをうかがいました。

そのような私に、今年に入って間もなく系図の責任が与えられました。支部長より面接を受けたとき、私のなすべきことがはっきりとわかりました。「私は霊界にいる人々の救いのために働こう。」

私はまず自分自身の系図から取りか

福音のとびらは開かれたり

かりました。3年前のソルトレーク神殿訪問の際、15枚の家族の記録を提出し、儀式を行なってきただけで、それ以後全く手を付けていませんでした。ところが、再び調べ始めると、次から次へと実に40通以上もの戸籍謄本を取り寄せることができました。しかも戸籍謄本だけから、新しく50枚の家族の記録ができあがったのには全く驚いてしまいました。これですでに儀式の終わっている人を含め全部で150名以上の私の先祖が救われることとなります。

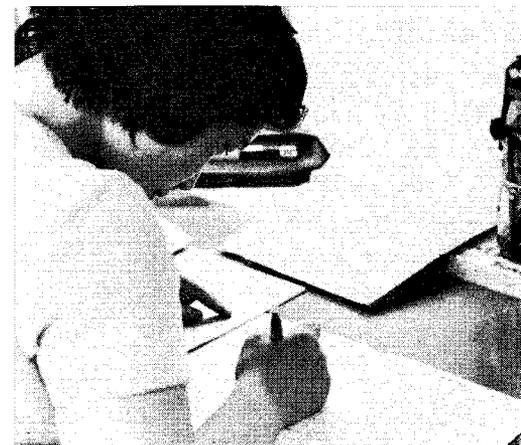
八王子支部の兄弟、姉妹は非常に熱心に先祖の探求をしています。皆50枚以上（可能な限り）作成しようと頑張っています。ある兄弟は現在39枚清書できました。その上、これから取り寄せる謄本が10枚以上もあります。私自身の経験と八王子支部の兄弟、姉妹の作成状況を見て、戦争で役所が焼失したり、その他よほどの理由のない限り家族の記録を1人50枚は作成できるという確信を持つことができました。そうすると、1人で100人以上の先祖は救えるのです。

1千人の兄弟姉妹がそれぞれ50枚の家族の記録を作成したとすると、5万枚、10万人以上の先祖が救われます。2千人の場合には、10万枚、20万人以上の人々が救えます。この10—20万人の儀式を執り行なうためには、ハワイ



神殿だけでは間に合いません。このように努力すれば、日本に神殿が建てられるようになると思います。ただ、今の私たちに必要なことは、先祖の名前を可能な限り探求することと、この日本の地に神殿を建てていただきたいという強い望みを抱くことではないでしょうか。

八王子支部では、聖餐会后、直ちに「救いを待つあなたの先祖のために系図を提出しましょう」と書いた大きな紙を黒板にはり、大きなテーブルを用意し、いつでも自由に来て書けるようにしています。しかしほとんどの兄弟姉妹は非常に多忙なので、主に家で手引きを参考にしながら鉛筆で下書きをします。そして日曜日に、下書きした用紙とその戸籍謄本とをいっしょにして、系図検査員に提出します。検



査員はそれを家に持って帰り、正しい仕事ができるように主に祈り、検査を始めます。謄本を隅から隅まで目を通し、下書きされたものに間違いはないかどうか、非常に注意深く調べます。時には、手渡された謄本からさらに数枚の家族の記録ができることがあります。その検査の後、メモ用紙に、必要な説明事項と次に取り寄せる謄本の戸主名と本籍地を記入しておきます。次の日曜日それを手渡し、検査を終えた

ものは家で清書し、さらに新しい謄本を数通取り寄せていただきます。この手順を繰り返します。直系と傍系を合わせて作成していきます。まず直系を調べそれから傍系を調べると、2度謄本を読むことになり、時間がかかります。しかも直系の先祖も傍系の先祖も同じように早く救われたいと願っているのです。

系図の仕事は子供たちを寝かせてから、夜の静かな時に行ないます。それ

は私の一日の生活の中で最も霊的な時であり、霊界にいる人々に心と思いを向けることのできる時間です。私は系図の仕事をしていると、心は楽しく喜びで一杯になります。霊界にいる人々が心から喜んでいてのを感じとることができるからです。この末日から福千年にかけて続行される神様の偉大な御業に微力ながらも従事できることを心から感謝しています。

霊界にいる者がこの神殿内でなしている仕事を知っているという証拠について、ウッド会長はアルバータの神殿で次のように述べています。

ふたりの子供を両親に結び固める儀式をしていた最中に、彼は母親に尋ねるように靈感を受けた。「姉妹、この表には貴方の子供がすべて含まれていますか。」「はい。」彼女は答えた。彼は再びその式を始めようとした。しかしもう一度同じことを尋ねた。彼女はもうほかに子供はないと告げた。彼は式を続行しようとしたが、もう一度、尋ねるように迫られた。「姉妹、ひとりのお子さんを書き落としているのではありませんか。」そこで彼女は言った。「はい、私は今思い出しました。ひとりをお落としていました。その子は生まれてすぐ死にました。名前を書き忘れていました。」その名前が与え

られ、それが最初の子であったので、最初にその名を記入され、全員が両親に結び固められたのであった。

そこでウッド会長は言った。「私が子供たちを結び固めようとするたびに、私に『お母さん、私を忘れないでね』と呼びかける声が聞こえました。そこで私はどうしても続けることができませんでした。その訴えはその書きもらしが発見されるまで何回もなされました。」死んだ私たちの親族は、何が行なわれつつあるかがわかるのである。彼らはしばしば私たちのすぐ近くにおり、彼らの心は私たちがなしている仕事に向けられているのである。私たちは彼らを幸福にすることができ、また私たち自身をも幸福にすることができるのである。

(「シオン山の救い手たち」 P. 256)

尋ねよ

さらば見出さん

赤松成次郎
ひばりが丘ワード部

12人の子供を持つ父親のことを考えてみましょう。その中のひとりの子供にその父親が、「いつも立派な服を着

て、私のそばにいなさい」と言い、他の子供たちに「ぼろをまとめて、私から離れていなさい」と言ったら、どうでしょうか。この父親は、子供たちに対して公平で、やさしく、愛情深いと言えますか。このことが教義と聖約38：26、27に述べられています。

私たちの天父なる神は、「人々を偏り見る者にあらざれば」（教義と聖約1：35）、子供たちが栄光を受けて、いつも身近にいて共に住むことができますようにと望んでいらっしゃいます。しかし、この祝福を受けたいと願う人

は、これを受けるに先立って、定められた律法と条件を創世の前から定められた通りに守らなければなりません。

(教義と聖約 132：5 参照) それは、信仰箇条第2条に挙げられているように「福音のおきてと儀式」です。つまり、天父のみもとで共に住むためには人はみな定められた儀式を受ける必要があります。バプテスマとエンダウメント、結び固めの儀式等がそれです。

もちろん、この儀式を執り行なう正しい権能のない時代に生きていた人々が何十億といえます。また、現在地上に

生きていても、福音が宣べ伝えられてそれを受け入れる前に、次の世界に行く人もいます。この人々はこの世で肉身を持っている間に、必要な儀式を受けることはできません。しかも、パプテスマ等の儀式はこの世に関わるもので、この血肉の体を持つ者によって執行されるというのが定めです。死者の霊は、この世の要素である水の中でパプテスマを受けることはできないのです。

そこで、生者によって死者のための身代りの儀式が行なわれます。しかも、生者の場合と同じように、死者も他の死者とはっきり区別ができ、その個人が証明できなければなりません。

その区別と証明のために必要な作業が系図の探求です。私たちは先祖の名前を調べて、ひとりびとりが救われるように助けるのです。先祖の救いの儀式の備えをするのは、私たちの**特権**であり**義務**なのです。

かつてアブラハムは、その忠実な先

祖の頭上にいかに大きな祝福が宣言されていたかを認めて、次のように語っています。

「われは先祖の祝福と、この祝福を他に施す職に按手聖任されんことを乞い求めたり。」(アブラハム 1 : 2)

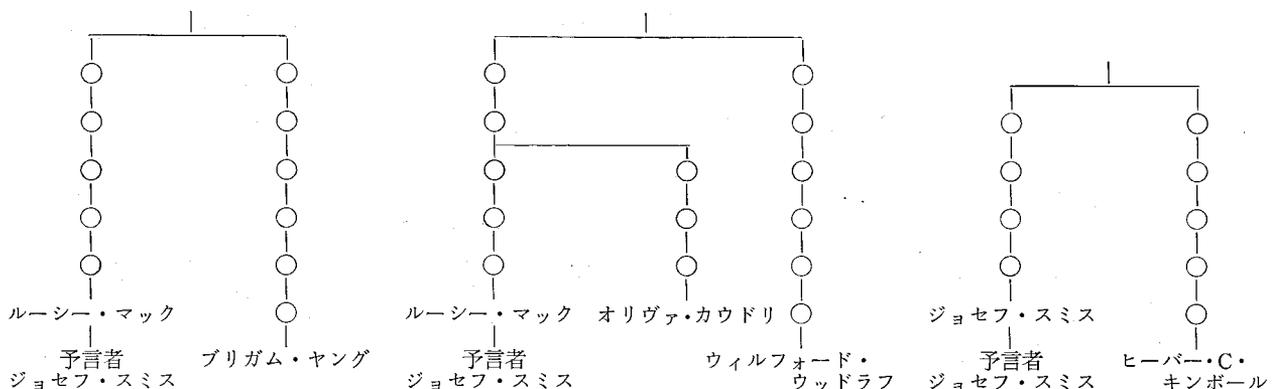
アブラハムはその生涯を通じて、神に忠実であり、義の原則を守り、それゆえに末代に至るまで祝福を受けるといふ約束を得たのでした。彼を通してすべての民は祝福されることになりました。そのような栄ある祝福は昔と同様に今日でも受けることができます。同じ律法に従うことによって、常に同じ祝福が得られるのです。しかも、アブラハムが神に願い求めた機会が私たちに今日与えられています。この機会が絶好の機会です。

その上、系図を調べることによって「あなたの父と母を敬え」(出エジプト 20 : 12) という神の大切な戒めを守ることにもなります。つまり、子供がその両親に結び固められて、代々アダ

ムに至るまでの連鎖ができ、系統が完全に保たれるのです。

系図探求に伴うもうひとつの興味ある祝福があります。それは、直系のみでなく、傍系としてつながる人々に対しても親密な気持を抱くようになるということです。ちなみに、初期の教会指導者から数名の人々を選び、その血のつながりによる関係を示してみましよう。下図は、予言者ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリ、ブリガム・ヤング(第2代大管長)、ウィルフォード・ウッドラフ(第3代大管長)、ヒーバー・C・キンボール(ヤング大管長の副管長)の関係です。その他、十二使徒のパーレー・P・プラット、オルソン・プラット長老も近い関係にあることが、系図の探求でわかりました。

さて、あなたとステーク部長、地方部長との関係はどうでしょうか？



教会員にとって、系図探求の目的は、私たちの先祖が誰であるか、その相互関係、各自の家族などを知って先祖が天父の日の光栄の王国に昇栄できるように、先祖の身分を充分に証明し、主の神殿内で代理の儀式を執行することです。系図の記録を手に入れることは、探求の最終目的ではなく、聖なる目的達成の手だてとなるものであります。

すなわち、記入された一枚の系図そのものは、主が**神聖に**

記録された死者の記録と言われている記録ではなくて、神殿の中で執行された儀式の記録が死者の**真の記録**となるのであります。そこで私たちは作成する記録をできるだけ正確にして神殿の儀式を正しい価値あるものとするのがいかに大切であるかを知ることができるのです。もしも儀式が正しくないなら主はその儀式に承認の印をおかれるはずはありません。

メルビン・J・バラード長老は彼の経験を次のように思い出しています。私たちはいかにローガン神殿の完成を待ち望んでいたことであろうか。献堂式はもう目前に迫っていた。父は神殿の着工の頃から手伝い、私は石切場から岩石を運んで来る父に、食事を持って行ったものである。私たちはその大いなる竣工の日をただ待ち望んでいた。私はその間にも父が親族のすべての資料を集めようとあらゆる努力をしていたのを覚えている。父は主が道を開いて下さり、死者に関する資料を得られるように朝夕祈り続けた。

献堂式の前日、最初の儀式に出席するワード部の人たちに推薦状を書いていたとき、ふたりの年配の紳士がローガンの市街を歩いて来て、そのひとりが私の妹に近寄り、手に新聞を渡して言った。

「これをお父さんのところへ持って行きなさい。だれもほかの人にあげてはいけません。急いで持って行きなさい。なくしてはいけません。」

妹はそれに応じ、母がその新聞を見せてごらんと言っても「私はこれをお父さんに見せなければなりません。そのほかだれにも見せられません」と言った。

妹は父親に一部始終を話した。旅行者を捜したが無駄であ

った。だれも彼らを見た者はいなかった。そこで私たちは新聞に向かった。それは「ニューバリ・ウィークリー・ニュース」で、私の父の英国の故郷で1884年5月15日に印刷され、1884年5月18日に、すなわち印刷されてから3日目に私たちの手に達したのであった。私たちは驚いた。なぜならどのような手段を講じてもそのように早く手もとに届くことはあり得なかったからである。

私たちはそれを調べる好奇心にかられた。見ると1頁に、休暇を利用して古い墓地を訪ねた一記者の報告が載せられている。その記者は、墓石の上に珍しい刻名を発見し、写し取ったのであった。記事は姓名や出生、死亡年月日などをも加え、ほとんど全頁を費やして書かれていた。それはバラード家が代々埋められていた古い墓地で、多くの私の父の直系親族やその他近親の友人の資料がすべて挙げられていたのである。

このことがローガン神殿のメルル神殿長に告げられたとき彼は言った。「あなたはこの仕事をなすことを許される。なぜならそれを主の使者を通じて受け取ったからである」と。

(「シオン山の救い手たち」 P. 261)

この世で生を受けるすべての人々が今私たちにもたらされているこの真理の中に住まう権利を持っています。

しかし、もうすでに霊界にいる人々は、彼らが望んだだけでは幸福を得ることができません。私たちが調べた系図により、ひとりひとり名前を呼ばれ死者のためのバプテスマを身代りによ

って受けてもらった人のみがそれを味わえるのです。だれでもが願う幸福、それを彼らはみな強く欲しています。彼らにはそれを求める権利があるので。私たちが系図の探求を怠ることによって、幸福を得る権利を奪うことのないよう、十分注意しなければなりません。霊界にいる私たちの先祖に、こ

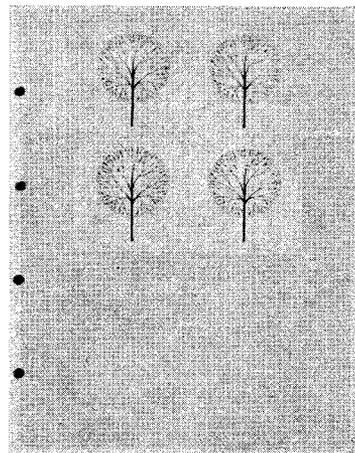
の道に入る扉を開くことができるのはあなただけなのです。

「地が打たれ世界が予言の如くやきつくされない中に、聖徒らが自分らの死者の救いにあるいは生存している親族を集めて救うために働く時間は余り残ってはいない。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」[英文] P. 330)

系図を調べるためには戸籍謄本を取り寄せたり、その他資料をそろえなければなりません。さらに所定の家族の記録用紙に記入するとき、多くの不明な点が生じてくることでしょう。系図協会では日本における系図記入を助けるために、日本語版の「系図記録提出の手引き」を出版しております。みなさまのアドバイザーとして大きな働きをなすことでしょう。

お求めは

東京ディストリビューション・センターへ



¥ 100.-

